

民族性と国際性

カール・カウツキー著

丸山敬一訳

訳者はしがき

私たちは今五人でオットー・バウアーの大著『民族問題と社会民主主義』(Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie. Wien 1907, Zweiter Band, Wien 1924)の翻訳をしている。マルクス主義者の書いた民族問題に関する学問的著作の中で最も内容豊かで、今日でもなお学ぶところが多いにもかかわらず、いまだ一度も日本語に翻訳されたことがないからである。序文、目次もいれるとちょうど六〇〇ページにな

るこの大著の出版を引き受けてくれる志高い出版社がはたして見つかるかどうか分からぬが、われわれとしては、なんとか良心的な出版社を探して活字にしたいものと考えている。

オットー・バウアーのこの大著が出版されるとすぐカール・カウツキーは、『ノイエ・ツァイト』誌に書評を書いた。それがここに訳出した『民族性と国際性』(Nationalität und Internationalität. Ergänzungshäfte zur Neuen Zeit. Jg.

26, Bd. 1, Nr. 1, 18. Jan. 1908) である。この書評に対して
 バウアーはすぐ『ノイエ・ツァイト』誌に反批判を書いている
 (Bemerkungen zur Nationalitätenfrage. Die Neue Zeit.
 Jg. 26. Bd. 1. 1908)。

スターリンは一九二二年から翌一三年にかけて、ウィーンに
 滞在し、カウツキーとバウアーの民族問題に関するこの論争を
 研究してあの有名な『マルクス主義と民族問題』を執筆した。
 彼の有名な民族の定義もこの二人に学んだものである。

しかし、論争はこの後も続き、カウツキーは「民族の解放」
 (Die Befreiung der Nationen. Die Neue Zeit, Jg. 35, Bd.
 2. 1917. 単行本 Stuttgart, 1918) と題する論文を同じく『ノ
 イエ・ツァイト』誌に発表して、重ねてバウアーを批判したし、
 バウアーもまた『民族問題と社会民主主義』の第二版を一九二
 四年にウィーンで出版した時、「第二版への序文」においてカ
 ウツキーの批判に対する詳細な反論を試みている。

「第二版への序文」は上記大著の翻訳が出版されれば、それ
 に収録されるはずであるから、それを除く三論文を邦訳して、
 この論争の全体を概観できるようにしたいと思う。

マルクス主義については、ソ連・東欧の崩壊後顧みる人がほ
 とんどなくなってしまったが、その全理論が間違っていたわけ
 ではない。なるほど共産主義の理想社会を作る理論としては、
 完全な間違いであることが明らかになった(そもそも人類がそ
 のような理想社会を作りうると夢想すること自体が滑稽である)

が、資本主義に対するアンチテーゼとしては、いまなお多くの
 有用な理論があると考えられる。民族理論の領域でもいまだ学
 ぶべき多くのものがあると思う。これら三論文を邦訳するゆえ
 んである。

民族性と国際性

一、民族の概念

オーストリアにおけるほど、民族問題が全政治生活、いやそ
 れどころか全社会生活までも支配している国は他にはない。
 したがってオーストリアほど民族問題について多くの文献が書
 かれた国も他にはない。マルクス主義の立場からの民族問題に
 関する最初の詳細な論究が一人のオーストリア人によって書か
 れたということも、何ら不思議ではない。それは、「民族問題
 と社会民主主義」(ウィーン、イグナーツ版)と題するオットー・
 バウアーのマルクス研究の堂々たる大著である。

バウアーは、民族問題に関する一般理論を提供しているが、
 彼の理論の基になっている事実は大分オーストリアから取ら
 れている。そして、この本の後半では、彼の理論をオーストリ
 アの諸関係に現実に適用することが試みられている。その点で、
 彼はすでに彼以前に一連の著作でオーストリアの民族問題を取
 り扱ったレンナーと同じである。レンナーは、すでに一八九九

年にシノプティクスとして『国家と民族』を、一九〇二年にはシュプリングガーとして『オーストリアの諸民族の国家を求める闘争』(『ノイエ・ツァイト』二〇巻二号の二五三ページでエレンボーゲンによって、同じく六四一ページでマックス・アドラーによって書評されている)を、さらに一九〇六年には、同じくシュプリングガーとして(序文ではすでにレンナーとして)『オーストリアーハンガリー君主制の基礎と発展目標』(ごく最近『ノイエ・ツァイト』二五巻二号、五〇七ページ以下でメーリンクによって書評された)を著している。

メーリンクがそこでレンナーに奉っている賞賛は、そのまま同時にオットー・バウアーにも向けられるべきものである。両者ともオーストリアを正確に知っており、史的唯物論の方法を的確に適用すべき術も心得ている。この方法が、どれほど杓子定規なものでないかということは、この二人の著者の著述の相違において明らかである。彼ら二人は同じ対象を同じ方法で、しかも緊密な個人的交際の中で取扱ひ、すべての本質的な点で同じ結論に達したが、しかし各々全く独自の成果を提出したのであった。レンナーは現実政治家として書き、バウアーは研究者として書いた。またレンナーは法律家として書き、バウアーは経済学者として書いた。前者の本領は、論告と実際の提案にあり、バウアーの本領は錯綜した諸関係の解明にある。しかし、だからといって両者のうちのいずれも、他の一人が得意とする分野に敬意を払わなかった、といつてはならない。レンナーに

あつてはラッサールの、バウアーにあつてはマルクスの思考方法が優越しているといつてもいいかもしれない。

しかし、マルクス主義が杓子定規なものでも、巨匠の言葉への忠誠でもないという事実は、バウアーとレンナーの差異を比較し、彼ら二人と同じようにオーストリアの民族問題に取り組んでいる科学的社会主義の他の代表者との間の差異を考慮に入れるならば、いっそう明確になるであろう。彼らは皆社会主義の父、マルクス、エンゲルスにさえも異議を唱えているのである。この問題に関する一八四八年の彼らの立場が支持しがたくなつていくということ、私はすでに一八九六年に『ドイツにおける革命と反革命』というマルクス叢書の出版に際して序文の中で明らかにした。私はその点でマルクスやエンゲルスからはるかに遠いけれども、だからといつてバウアーやレンナーが展開した全てに同意するわけではない。

われわれの間の意見の食い違いは、一部はわれわれが三つの異なつた世代を代表しており、各々が異なつた状況にあるオーストリアを知っているということに原因があるが、しかし、またそれは、民族を考えるに際して、われわれには把握することの困難な社会的形成物、社会的発展の産物、今後の社会的発展のための最も強力な諸要因の産物を取り扱つていくということにもおそらく原因があるのであろう。そして、この産物たるや、何らかの法令や規則によつて一定の明確な社会的有機体に変えられるということは、決してありえないのである。民族性とは

一つの社会関係であり、絶えず変化し、異なった諸関係の下では非常に異なったものとなる。それはまたプロテウス〔変幻自在の人〕であり、われわれが捉えようとする、手からするりと逃げてしまふにもかかわらず、いつもそこにあり、われわれに強力に働きかけるものである。

フランスにおいてエルベ主義が栄え、ドイツ社会民主党が自民族に反対する義務について語り、ロシア革命がツァーリ帝国のさまざまな民族を揺り動かし、ユダヤ人もみずから民族として自立しようとしている今日、他方ではイギリスがカナダ、オーストラリア、南アフリカと共に、両大洋を結ぶ一つの民族国家を作りだそうと試み、同時にアイルランド民族主義の高揚に対して再び威嚇的に頭をもたげている今日、民族性の概念と作用に関する研究は、再び特別な関心と呼ぶことであろう。かくして、パウアーとレンナーの研究は、ひとりオーストリア地方にとどまらぬ重要性をもっているのである。資料への通曉、方法の一貫性と多産性のゆえに、必ずしもあらゆる点で彼らに従うことのできない人々に対しても、豊かな新しい洞察を切り開いているのである。

たしかにパウアーの本は、すでにその出発点において、すなわち民族の概念の定義において異論を呼び起こすものである。

もちろんパウアーは、正當にも民族を社会的発展の産物として理解した。

彼はきわめて的確にいう。

「かくして、われわれにとって民族とはもはや固定した物ではなく、生成の過程にある物であり、その本質において、人類が生活の維持と種の保存のために闘う諸条件によって規定されているのである。そして、民族というものは、人類が食料を働いて得るのではなく、単に自然の中から探し出すという段階、またその生活資料を単なる占有や先占によって得られた持ち主のない財から手に入れているという段階では、いまだ発生せず、人類が必要とする財を労働によって自然から獲得するという段階になつてはじめて発生するものであるから、各々の民族の個性は、人々の労働様式によって、彼らが用いる労働手段によって、彼らが意のままにしうる生産力によって、彼らが生産の中で相互に取り結ぶ諸関係によって条件づけられているのである。あらゆる個々の民族の生成を、人類の自然との闘争の産物として理解すること——これこそが主要な課題なのであり、その解決のためにわれわれに役立つのは、カール・マルクスの歴史的な方法なのである」(一一〇、一一二ページ)。

これは全く正しい。だが、パウアーがわれわれに提供している民族の特殊な定義は、大変あいまいなものであるので、民族を他の社会組織から分かつところのいかなる標識をも与えるものでないか、あるいは不適切なものであるかのどちらかである。

彼は民族を運命共同体から発生するところの文化共同体、および性格共同体と呼んでいる。

あらゆる社会的組織は、おのおの一つの運命共同体であり、

すべての組織は、おのおの共通の運命と伝統とをもっている。民族、市町村、国家、ツンフト、政党、株式会社でさえも、運命共同体である。さらに、これらの団体の多くは、同時に文化共同体でもあり、その成員の共通の文化の上に成り立ち、彼らに対して共通の文化を伝達するものでもある。運命と文化の共通性はおそらくまた共通の性格を發展させるであらう。それは、民族においても都市においても、ツンフトにおいてもカーストにおいてもそうであり、いやそれどころか、他の政党や階級と鋭い対立関係に立つ階級政党が存在し、長く活動しているような場合には、政党においてさえそうである。

だが、他方で人間集団の運命と文化の共通性は、民族を他の民族から鋭く分かつところの何物をも作り出しはしない。民族性の差異にもかかわらず、ドイツ系スイス人とウィーン人、あるいはホルシュタイン人を結び付けるよりもはるかに緊密な運命と文化の共通性が、ドイツ系スイス人とフランス系スイス人とを結びつけている。

さらに、一民族の内部に大きな階級的差異の存在するところでは、民族間に存在する文化的差異よりもはるかに深い文化的差異がその民族内に存在するものである。他方で、階級の同一性はまたしばしば異なった民族の同じ階級の成員の間に、一つの文化共同体を作り出す。いずれにせよ、シュレースヴィヒに住むドイツ人農民とデンマーク人農民の間には、シュレースヴィヒのドイツ人農民とベルリンに住むドイツ人ジャーナリストや

芸術家との間にあるよりもはるかに緊密な文化の共通性がある。他方で、ベルリンのドイツ人ジャーナリストや芸術家は、パリのジャーナリストや芸術家とより緊密な文化共同体の中にある。はたして、階級の差異はまた民族の中の文化にあずかる部分のみが、つまり現在までのところ、支配・搾取階級のみが民族を形成するという奇妙な命題へとパウアーを導いた。

「シュタウフエンの時代には、民族は騎士の文化共同体以外の形では存在しなかった。……この文化的影響の同一性が生み出す均一な民族的性格は、ただ民族階級の性格にすぎなかった。……民族を統一する何物にも農民は参加していなかった。……かくして、ドイツの農民は当時は全く民族をなしておらず、民族の隷属民をなしていたにすぎない」(四九、五〇ページ)。

「労働手段の私的所有に基礎をおく社会では、支配階級——かつては騎士階級、今日では知識階級——が、民族の歴史によって形成された同じ教養をもち、統一言語と民族教育によって媒介されて、類似した性格を帯びるようになった人々の総体としての民族をなしている。だが、広範な人民大衆ははまだ民族をなしていない」(二三六ページ)。

社会主義がはじめて「近代労働者階級の……進化的——民族政策」を作り出すであらう。

「この政策は単に民族的性格の一層の發展を妨げないだけでなく、初めて全民衆を民族にし、民族へと發展させようとするがゆえに、……進化的政策と呼びうるのである。この政策にとつ

ては、単に民族の発展が問題だけでなく、全民族の民族への発展が問題なのである」(一六〇ページ)。

これは非常に正しい核心をもった機知に富んだ考えである。だが、この考えは、民族問題に関しては、われわれを誤った方向に導く。なぜなら、この考えは、現代のあらゆる階級の民族的思考の力、今日の全民族の民族的対立の原因を、われわれが理解するのをまさに不可能にさせるような意味で民族を捉えているからである。

パウアーは、ここで農民こそまさに民族性の保持者であるというレンナーの観察と対立している。彼はオーストリア(ハンガリーも含めて)において、最近百年の間に相当数の都市がその民族性を転換したことを示した。ドイツの都市からハンガリーやチェコの都市になったのである。他のドイツ人の諸都市、とりわけウィーンは、再び外国諸民族の巨大な流れを受け入れており、ドイツ民族と混じり合わせている。それに反して、農村にあっては、言語の境界はほぼ完全に固定している。

オーストリアの比較的大きな都市では、一九世紀の初めにゲルマン化過程が成功し、それらの都市は完全にドイツ化した。ガリチア、クロアチア、イタリア地域の諸都市を例外として。しかし、農村住民は民族性を堅持し、オーストリアの単一民族国家への転換も彼らのところで挫折した。農民はあらゆる旧来の因習に執着しているのと同じく、その民族性にも頑固に執着している。それに反して、都市住民、とりわけ知識階級ははる

かに適応力がある。知識階級のみが民族をなすすれば、一九世紀初めのオーストリアにおいては、ポーランド人とイタリア人を別にすれば、ドイツ人のみが民族をなしていた。

さて、文化共同体についてはこのくらいにして、次に民族を特色づけ、形成するという民族的性格について考えてみよう。たしかに、人類の個々のグループは、特殊な集団的性格を展させ、それは通常その個々の成員の間のみ固有である。それは、外貌、感覚、思考における共通性であり、成員相互の共感と理解を容易にするものである。そのような性格は、人類の一グループが長期間同じ諸条件——同じ気候、同じ環境、同じ労働様式と生活様式——のもとで生活してきたところに生ずるものである。そのような諸条件が数世代にわたって変わらないならば、その性格は遺伝されるものとなり、その子孫たちがたとえ他の諸条件のもとに置かれるようなことになっても、しばらくの間は彼らに取りつき、かくして人種的性格の形をとるようになるのである。

生存競争のあらゆる特殊な形態が、おのおの特殊な肉体的・精神的特徴を必要とする。これらの特徴を身につけている人々が、生存競争のこの特殊な形態が存続するかぎり、最も容易に自己の地位を確保し、繁殖することができる。そのうえ、生活様式と外的な影響の特殊な形態が、それぞれ特殊な結果をもたらす、それらは必ずしもいつも個人や種にとって有益なものばかりであるとはかぎらないが、しかしそれから逃れることは、

極度に困難であるか、あるいは全く不可能である。かくして、草食にかぎられる人々の性格は、もっぱら肉食を主とする人々のそれとは異なるのである。

最後に、相互関係の法則が問題になる。それによれば、ある器官の一定の変化は他の器官の一定の変化を伴うことなしには起こりえないのである。

たとえば、去勢は全有機体と性格に影響を及ぼすことが知られている。

「ある植物が乾燥した場所への移植によって、葉の硬さが増すとすれば、この変化は他の部分の栄養に反作用し、茎の短小化と植物全体の矮小化をもたらす」(ヘッケル)。

すべてこうしたことは、同じ諸条件のもとで長く暮らしてきた人々のグループの中では、そのメンバーが彼らだけに固有で、他のグループのメンバーとは異なった共通の性格特徴を身につける、という結果をもたらす。

全民族が同じ諸条件のもとで生活しているところでは、彼らは共通の民族的性格を発展させるであろう。それに反して、個々の民族同胞が生活している諸条件が多様であればあるほど、たとえば地理的諸条件——平野か高山か、内陸か海岸か——が異なっていればいるほど、分業と階級区分——農業と工業、大都市と村、知識階級と無知な人々、等々——が進んでいけばいるほど、最後に、民族のそれぞれの部分で社会的発展のテンポが異なっていればいるほど——ある部分はまだ半封建的状态の中

で生活しているのに、他の部分ではすでに高度に発展した資本主義的生産様式に到達しているというように——、共通の民族的性格についてはそれだけです語り得なくなる。

人は数十年前までは、かろうじてロシア人とハンガリー人の民族的性格について語る事ができた¹⁾。というのは、これらの住民にあっては、民族の大部分が農民と田舎風貴族とから成っており、その領域の到るところで性格が酷似しており、経済的發展がきわめて緩慢にしか起こらないので、民族の個々の部分にいかなる顕著な差異も生じておらず、都市の住民はいまだとるに足らず、一部はいまだ農民的性格を保持している移住農民によって、一部は民族に影響を与えない他民族(ハンガリーではドイツ人とユダヤ人)によって構成されていたからである。

ところが、その領域が多様な地域に及んでいる——北海とバルト海の海岸、北ドイツの平地と高アルプス山系、その間にあるさまざまに異なった地域、ほぼ二千年の文化をもつ明るく暖かいライン溪谷から、後進的でいじけたオーデル河流域まで——ドイツ民族のような近代的民族について、人はいかにして民族的性格を確定することができようか。しかも、この民族の内部には、顕著な社会的差異が存在するのである。メクレンブルクとポーゼンには半封建主義があるかと思えば、ザクセンとルール地域には高度に完成した資本主義がある。ウィーンやベリンのような百万都市があるかと思えば、その隣には世界から見捨てられた寒村がある。そのうえ、さらに階級と職業に基

づく分裂がある。

それゆえ、ドイツ民族を他の民族から区別するような一定の民族的性格は、一体どこに存在するのであろうか。ラインラン人がドイツ人の代表なのであろうか。それとも上バイエルン人であろうか。ホルシュタイン人であろうか、それともウィーン人であろうか。ドイツ人の典型をなすのは、ファウストであろうか、カール・モールであろうか。ビスマルクであろうか、ブレージィヒ伯父さんであろうか。

他方で、われわれは二つの民族が互いに境を接し、同じ生活諸条件のもとで相並んで生活しているところでは、この二つの部分が共通の性格を発展させるのを見ることができるといえる。今日二つの違った民族に所属しているベーメンのドイツ人とチェコ人あるいはオランダの西フリース人とプロイセンの東フリース人がそうである。さらに、民衆は政治的事件によって、民族的所屬を替えることがありうるが、生活諸条件に変化がなければ、その性格は変わらない。エルザスの農民は、みずからジャンと称しようとも、ハンスと称しようとも、依然として同じ性格にとどまっている。

どんな場合でも、大文化民族の民族的性格は、議論の多い問題であり、捉えがたい現象をなしているのです。どんな微風でも吹き払ってしまう蜘蛛の糸のようなものに、堅固な力で民族を結びつけ、他の民族から誤認の余地のないほど明確に区別する紐帯を見ようとすることは不可能である。

民族を一つに結びつけるさまざまな紐帯の中で最も強力なものが言語であることは、だれの目にも明らかであるにもかかわらず、それを承認することを、なぜパウアーが拒絶したのか、全く理解に苦しむことである。彼はこの問題をきわめて疎略に扱っているにすぎない。

「人々を一つの民族に結びつけるものは、言語の共通性であろうか。だが、イギリス人とアイルランド人、デンマーク人とノルウェー人、セルビア人とクロアチア人は、共通の言語を話しているが、一つの民族を成していない。反対にユダヤ人は共通の言語をもっていないにもかかわらず、一つの民族を成している。……民族の問題は、ただ民族的性格の概念からのみ展開されうる。……これを否認しようとする人にとっては、民族は無である。ベルリンに住み、ドイツ語を話すことのできるイギリス人は、それゆえドイツ人になるのであろうか」(二ページ)。

これが、パウアーが言語について述べたすべてである。まずベルリンにおけるイギリス人を観察しよう。人は第二の言語を習得することによって、その民族性を失う、あるいは理解できる言語の数だけ多くの民族に所属することになると主張する人は誰もいない。イギリス人は、他のいかなる言語よりも英語をよりよく話すことができるかぎり、イギリス人とどまるであろう。しかし、彼がイギリス人とはいかなる結びつきもなしにベルリンに長く住んだため、英語をすっかり忘れ、ドイツ語がいかなる他の言語よりもよりよく知っている言語になっ

たというような場合には、彼はその性格をなんら変更することなく、この言語の転換によって、もちろんドイツ人になったのである。

人が最も好んで話す言葉、最もよく操ることのできる言葉の転換による以外のいかなる方法によって、人はその民族性を転換することができようか。性格の転換によるのでは、断じてない!

次に、イギリス人とアイルランド人、デンマーク人とノルウェー人、セルビア人とクロアチア人の問題に移ろう。これらは、民族共同体は言語共同体ではない、ということを実証するものであろうか。すべてのイギリス人が同じ言語を話しているわけではない。すべてのデンマーク人、すべてのセルビア人もそうである。もちろん、イギリス人はアイルランド人と、デンマーク人はノルウェー人と、セルビア人はクロアチア人と言語を共有している。しかし、このことは、あらゆる民族共同体は言語共同体ではない、ということを実証するものではなくして、もっぱら言語共同体は時とすると二つの民族(あるいはそれ以上、英語の言語共同体は、アメリカ人、オーストラリア人、その他)を含むことがあるということ、言語の共通性が民族の唯一の性格標識ではないということ、それと並んで、なお他の標識が存在するということを証明するにすぎない。だが、このことは、言語がこれらの標識の一つであること、しかもそれらの中で最も重要なものであること、この事実をなんら否定するものではない。

ない。

一つの民族でありながら、その各部分が異なった言語共同体に所属しているような民族がもし存在すれば、もちろん事態は違つてこよう。その実例を提出しようと、パウアーもまた試みたが、彼はたった一つの事例しか持ち出すことはできなかった。そして、もし第二の実例を探し出そうとしても、それは彼にとつて困難だったのであろう。この一つの実例とは、それがそもそも民族をなすかどうかきわめて疑わしく、もし人がそれを一つの民族として認めようとする時にはいつでも、民族としての特質をなんら持っていない民族として認めざるをえず、それゆえ何人も民族の典型とは認めることのできないような民族であった。「ユダヤ人の民族的自治」という章の中で、あらゆる民族に当てはまるのが、ユダヤ人には当てはまらず、この民族は民族としての将来をもっていない、ということをも十分納得のいくように説明したパウアー以上に、このことをよく知っている者はいないであろう。

ユダヤ人は、たしかに異なった言語を話している。だが、ドイツ語を話すユダヤ人は、ドイツ民族のメンバーではないであろうか。フランス語を話すユダヤ人はフランス人ではないであろうか。ユダヤ人が特殊な民族だと感じられるのは、東ヨーロッパにおいてのみであるが、そこでは彼らは彼ら自身の言語、すなわちヘブライ語ではなく、墮落したドイツ語、イディッシュ語を話しており、それが彼らを周囲からきわだたせている。

実際、ユダヤ人はその起源においては、共通の言語をもった一つの民族であった。その後、それは宗教共同体となり、さまざまな民族の成員を受け入れ、かつまた、さまざまな民族の間にも受け入れられたのであった。ユダヤ人の宗教団体が宣伝によって、他民族の間に一層拡大していく可能性をキリスト教が奪ってしまった時、ユダヤ人は特殊な人種となった。なぜなら、宗教団体外部での正当な発展がユダヤ人に禁止され、ゲルマン人の未開な自然経済の真只中で、ローマ時代以来受け継がれてきた貨幣経済の代表者として、特殊な職業集団となったからである。ユダヤ人が中世に演じ、今日なお東ヨーロッパで演じている役割を知ろうと思えば、民族という名称よりはカーストという名称の方が、よりよく把握できるように思われる。われわれがいまここで取り扱っている近代ヨーロッパの諸民族の中にはなく、インドのカーストの中にユダヤ人に一致する現象をわれわれは見出すことができるが、それはエルサレムの破壊とキリスト教の台頭の後に形作られたものであった。ユダヤ人を民族として保持しようという試みは、実際は特殊なカーストとしてのその存在を持続させようとする試みにすぎない。そのような努力は、近代国家にあっては理解しがたいものである。それはただ、モスクワの官僚制やルーマニアの大貴族制の破廉恥な経済のもとにおいてのみ成功しうるものである。

民族の本質を認識するために、ユダヤ人に言及してみても何物ももたらさない。しかし、これが民族共同体は言語共同体で

あるという見解に反対してパワーが提出しえた唯一の事例である。

民族的性格が問題の多い、理解しにくいものであるのに対し、民族の言語は明確なものであり、すべての人が直ちにはっきりと認識しうるものである。そのうえ、民族的性格が人々の社会的協力にとって全く無意味なものであるのに対し、言語はそのための第一の前提条件をなしている。われわれの言語を話さず、意志を疎通しあうことのできない人々は、われわれの社会的交通の外部に立っている。それに反して、われわれの言語を話すすべての人々とは——その性格や社会的地位がどのようなものであれ——社会的に一体であると感ずる。外国にあっては、民族的差異の方がしばしば険しい階級対立よりも強力なことがある。フランス語を一語も知らずにフランスに移住し、ドイツ語を話す階級的同志を身近にもたないドイツ人労働者は、どれほど国際的・階級的信念に厚かろうと、フランス・プロレタリアの間において実に不安で孤独であろう。そこで、彼は最初に自分に話しかけてくれたドイツ人——たとえ彼が故国にあっては強烈な憎しみの対象となっている搾取者であったにしても——に喜んで挨拶を返すであろう。

社会生活における言語の強力な役割は、民族感情の力のかなりの部分をわれわれに納得のいくよう説明する。それに反して、民族的性格——それがどのようなものであるか誰も正しくは知らないし、われわれの共同生活に対して実際に目に見える影響

を及ぼしていない——の共通性は、民族感情の力について何物も説明しないのである。

パウアーが、民族の決定的なメルクマールとしての言語について何物も知ろうとしないということは、まさにオーストリアにおいて民族問題がもつばら言語問題として登場してきているという事実を見れば、ますます奇妙なことである。

二、民族の結合

言語は社会的交通の不可欠の道具である。社会的交通と共に、社会的交通から言語が生まれる。それゆえ、言語の通用範囲は、もともと社会的諸関係によって条件づけられていると言つてよい。相互に規則的な交通関係にある人々は、同じ言語を話さなくてはならない。そのような交通の範囲、すなわちそこで話されている特殊な言語の通用範囲は、さまざまな諸条件のもとで、きわめてさまざまでありうる。その拡大は、生産様式、地形、交通諸関係によって決まる。国際的な通商路のいずれからも遠く離れて、その生産物がその住民向けにのみ生産されているような狭い、孤立した山峽では、特殊な言語が発展し、数百年にわたって保持される。他方、交通路として役立つ大河の流域に住んでいる人々は、容易に広大な言語共同体の中に引き込まれる。

一般的には、個々の言語の領域は初めはきわめて狭いものであったが、経済的發展の進行の過程でますます拡大し、ますます

す多くの言語が消滅して行った、ということができよう。北及び南アメリカのインディアン総数は、ほぼ一千万人であるが、その言語は控え目な見積もりによつても、百にのぼる。多くの研究者ははるかに多くの数をあげており、四百、またはそれ以上という人もいる。

それに対して、英語圏の領域は今日一億二千五百万人に達している——それは一世紀のうちにはほぼ六倍になった。

言語領域の住民が定住していない場合には、その範囲は常に変動している。遊牧民は容易に出会い、容易に別れる。今日種族は、そのメンバーの一部を、人口があまりに多くなつたか、あるいは旱魃、洪水、疫病などの食料空間を狭くする天災のゆえに、新しい牧草地や狩り場を求めて送り出し続けなければならない。過剰人口は遠隔地へと移住し、その言語をそこに移植する。すると、その言語は新しい諸条件のもとで特殊な発展をする。しかしまた、種族の全体が敵の暴力や天変地異によって本拠を追われ、新しい環境の中に入り、そこに彼らの言語を伝えるか、他の種族の言語を取り入れて、自分たちの言語を失う、といったことも起こりうる。時には、さまざまな種族が長期間にせよ短期間にせよ一緒に住み、防衛のためであれ、攻撃のためであれ、さらなる移動のためであれ、個々の種族の力を越える目的のために協力するということも起こりうる。さまざまな分子のこの共同生活は、その言語にも影響を及ぼし、時には新しい言語を生み出すこともあるかもしれない。この段階での諸

種族は、霧状のカオスをなし、上下に泡立ち、ここで引き裂かれるかと思えば、かしこでひと塊となり、恒常的な民族を形成することがきわめて困難である。定住が初めて民衆を、不確かな混沌状態から明確な境界をもった団体にするのである。われわれはすでに民族の存続にとって農民がどれほどの重要性をもつものであるか、を見てきた。同様に、農民は民族の形成にとっても大きな意味をもっている。定住する領域を手に入れて初めて、民族は言葉のあらゆる意味における確固たる地歩を獲得するのである。民族の諸関係は、その時から恒常的なものとなり、強固なものとなるのである。

だが、領土は民族を持続的に結合させるだけでなく、持続的に分離させる点でも、重要な意味をもっている。

言語の共通性と同じく、地域の共通性もまた一連の共通の利害、物の見方、感じ方を生み出すが、それらは同じ言語を話しているても他の領域に住んでいる人々とは異なるのである。そして、もし外来の民衆が自分たちの領土を強奪し、支配し、搾取するならば、その民衆が同じ言語を話しておろうとおるまいと、自分たちの民族的な敵となる。

かくして、異なった民族が同じ言語を話すことがありうるということ、言語共同体は必ずしも民族共同体と一致するとはかぎらないということが明らかになる。これらこそまさに、パウアーが言語共同体こそが民族の最も根源的なメルクマールであるという見解に対置しえた事例である。それらはただ民族とい

うものは多くの人が信じているほど単純な現象ではないということ、多様な要因の歴史的産物であるということを証明するにすぎないのである。

民族を一層強固に結びつける手段として、社会的発展の過程で生み出されてきたものが、文字である。民族共同体の基盤である言語は、今や固定され、変化が困難となった。古い民族の混合によって共通の混成語を作り出すというやり方での新民族の形成は、今や重大な障害に出会うことになった。それに対して、今ではある民族の言語が書き言葉となり、同系の言語をもつた他の諸民族を受け入れるという形で民族の拡張が促進されている。

話し言葉は、ただ個人的交通の範囲しか届かない。ところが、書き言葉は書き手の人物に結びつけられていない。それは、書き手が死んでしまった後でも、後の世代に話しかけることができるし、書き手が決まっていたことのない地域の人々にも話しかけることができる。だが、書き言葉は話し言葉を決して完全には再現することができない。人間の音声の豊かさを、アルファベットのわずかな文字で汲み尽くすことは不可能である。書き言葉はいつでもただ話し言葉の輪郭を提供できるだけであり、ふつう話し言葉の印象を呼び起こすことができるにすぎないのである。二つの言語が相互に近親関係にあり、同じ概念をしばしば似た言葉で表現しているところでは、彼らが同じ書き言葉をを用い、それを読むに際して同じ印象を受けるといふことが起

こりうる。二つの言語共同体のメンバーが、口頭ではお互いに理解し合えなくとも文書では理解し合えるということがありうるのである。

ここで注意すべきことは、言語の近親性ということをも、人間の相互の近親関係のような意味で、つまり、同系の諸言語が共通の母親から、一つの原始語から、そしてついには、すべての言語がたった一つの言語から発生したかのように考えるべきではない、ということである。

このような見解の根底にあるのは、無意識のことながら、モーゼ流の天地創造神話である。それは、とっくの昔に素朴な神話と考えられているにもかかわらず、われわれの思考に依然として影響を与え続けているのである。今なおランプレヒトは、人類の発端としての「最初の一組の両親」について語っている。しかし、われわれは最初どこかに一組の人間が発生したと考えるのではなく、広い領域において、おそらくはさまざまに異なった領域において、猿人が多くの群れをなして徐々に人類へと発展したと考えるべきである。最初、他の群れといかなる交通ももたなかったこのような群れの各々は、自らの言語を独力で発展させたであろう。それゆえ、われわれは人類の始まりにあつては、たった一つの原始語ではなく、無数の原始語があつたものと仮定しなければならない。だが、このことはあらゆる言語がそれぞれ他の言語と全く違って、ということの意味するものではない。意志の自由という全くの幻想にもかかわらず、

同じ原因は同じ結果を生むという法則が、人間の行為にとってもまた当てはまるのである。同じ肉体的組織と同じ外的環境のもとにあつては、人間は同様な行動をとる。かくして、異なつた民族が相互に完全に独立して、全く同じ社会現象を生み出すことがありうる。このことは、しばしば無視される。二つの民族の間に一致した社会制度、伝説、芸術作品、等々が発見される場合、多くの研究者は直ちに、このことは二つの民族の間にかつてなんらかの関係があつたか、あるいはかつて一つの民族をなして、後に分かれたか、または隣あつて住んでいて、一方が他方から学んだか、のいずれかを証明するものである、と仮定する。もちろん、そういう場合もありうるが、いつもそうだというわけではない。われわれは、そのような関係の全く存在しない所にもそのような一致を見出すことがあるのだ。たとえば、クノーウがみごとに証明したように、マルク共同体制度は、ペルー人の所でもゲルマン人の所でも発生したのであつた。

同様にわれわれはまた、言語に関しても、同じ環境のもとでは同じものが生み出され、類似した環境のもとでは類似したものが生み出されるということ、それゆえ、同じ地域の同じ環境のもとで異なつた群れの間に相互に独立して発生した言語もまた、一定の類似性、一定の近親性を示すことがありうる、と考へることができる。他の近親性は、一民族が膨張して数民族に分かれ、その各々が古い言語を取り入れ、一層発展させるとい

うところから生ずる。他方でまた、異なった言語をもついくつかの民族が相互に長期にわたる緊密な接触を続け、その際各々の民族が他方から多くのものを取り入れた結果、その言語がなるほど同一とは言えないが、類似した、あるいは近親関係にあるとはいえるものになるという場合も起こりうる。

ゲルマン人という名で総称されている種族のように、数百年にわたって、絶えざる相互の接触、集結、解体を続けながら大陸を縦横に放浪して歩いた民族集団の言語の類似性は、それゆえ、多様な原因をもっている。それは、パウアーが仮定した(三二ページ)ような「ゲルマン人の共通の基幹民族」からの彼らの由来をいささかも証明するものではないし、彼らの定住の後初めていくつかの方言に分裂した一つの共通の原始語の存在を証明するものでもない。一般に、言語の発展過程は、単一性から多様性ではなくして、その反対である。

異なった言語の間の近親性がどのように発生したにせよ、書き言葉は近親の言語を話しているすべての人々を一つの新しい言語共同体へと統合し、近親の言語を話している近隣の諸民族を一つの共通の大民族へと結集する手段を作り出したのであった。共通の書き言葉が、今や民族語となり、この新しい民族共同体内部の二、三の民族によって話されている言葉は単なる方言へと下落する。共通の書き言葉から共通の民族文学が成長してくるにおよんで、この新しい民族的紐帯はますます強固にして、解きがたいものとなる。

だが、領土と同じく、書き言葉と民族文学もまた、近親の言語を話す諸民族を、単に民族的に統合するだけでなく、民族的に切り離しもするのである。低地ドイツ語は、たとえば、アレマン語やバイエルンのオーストリア語とよりも、オランダ語の方がはるかに近親性が高い。さらに、領土的・文化的に見れば、ドイツの沿岸地方の住民はドイツ・アルプス人とよりもオランダ人の方がはるかに近い関係にある。ところが、彼らはドイツ・アルプス人と一緒にあって、同じ書き言葉を受け入れ、同じ民族文学を作り上げてきた。同じ時オランダ人は、自らの文学を発展させた。国家的分離ではなくして、独自の文字と文学がオランダ人をドイツ民族から切り離している。他方、ドイツ系スイス人は、国家的独立にもかかわらず、ドイツ民族に属している。ドイツの北海沿岸の住民は、口頭では、チューリヒ湖畔の住民とよりも、チューイダー湖畔(現在オランダのアイセル湖)の住民の方がより容易に理解し合える。だが、リリエンクロンやフレンセンというような人々は、ゴットフリード・ケラーやC・F・メイヤーと同じ言葉で書いている。

オットー・パウアーが、民族を文化共同体と称し、ホーエンシュタウフェンの時代には騎士のみが、後には知識階級のみが民族をなしており、民族の大衆、とりわけ農民は民族の隷属民をなすにすぎないと述べた時、明らかに特に文学の共通性に注目していたものと思われる。

彼はこの点について次のように述べている。

「われわれの古典文学は、すべてのドイツ人にとって経験となり、決定的な運命となることによってドイツ民族の統一的性格を、共に鍛え上げたのである。われわれの古典文学について言えることは、同様にドイツの啓蒙主義についても言えることである。……ドイツ市民階級が当時みずから作り出した、外来のものを自国のものと融合させたりして作り出したものは、今なおわれわれの所有物である。一八世紀の経済的發展が、あの文化を作り出したのであるが、ひとたび発生するや、この文化は生き生きと作用する要因となり、ずっと作用し続けることによって、後の世代にまで同種の影響を及ぼし、個々の個人に分有されて、民族を文化共同体として統合したのであった。

だが、もちろん！ ドイツ・ブルジョア文化の力は、力いっぱい頑張ってみても、今日なお全民衆の上には及ばず、ただ所
有し支配する階級にのみ及んでいるだけである」(八一、八二ページ)。

かくして、全民衆を包括するドイツ民族は存在しない。われわれはいつかそのような民族を見ることがあると期待していいのだろうか。その存在が、ドイツ文学の統一的性格によって作り出されるドイツ民族の「統一的性格」にかかっている、と考
えられる限りで、そんなことは決してありえない。文学がかつてそのような性格をもっていたにしても、今日ではそれはますます失われつつある。それゆえ、文学によってドイツ民族に統
一的性格が与えられるということは決してない。

文学は決して文化の全体ではなく、その一部分にすぎない。文学は言語的文化であって、造形芸術や音楽のような技術的文化から区別される。後者の種類の文化は、他民族に輸入されるに際して、言葉の翻訳を必要としない。それゆえ、技術的文化の共通性はたくさん
の言語共同体を含みうる。だが他方で、文学の共通性は民族的共同体の唯一の紐帯でもなければ、最も重要な紐帯でもなく、最も根源的な紐帯でさえもない。ましてや、誰も正確に確認することができず、どこにも誤認の余地なきほどはつきりと現れ出していない民族的性格の共通性によって、民族共同体が結びつけられているということは、最もありえないことである。それに反して、話し言葉、領土、書き言葉といったメルクマールや紐帯は、明白で、どんな単純な人でも即座に認識することができ、いつでも有効である。歴史的な運命共同体が、事情によつては、これらの共通性から独自の民族的性格の共同体を生み出し、それが民族的共同作業をよりいっそう緊密なものにし、他民族に対する境界をいっそう厳しく閉ざすことに役立つことがありうるかもしれない。しかし、民族の発生と存続にとって無条件に必要とされる要件が、性格共同体を作り出すわけではない。ほとんどの場合、性格共同体は高度の社会的分化をもたない原始的段階か、わずかな領域しかもたない小民族にのみ固有の現象であつて、民族が拡大して職業や階級に分裂して行けば行くほど、ますます消滅する傾向をもっている。

三、国際的文化圏

われわれは、言語が社会交通の最も重要な手段であることを見てきた。経済的発展とともに、この交通が拡大して行く程度に応じて、同じ言語を話す人々の範囲もまた拡大して行くにちがいない。ここから、一、二、三の民族が勢力を広げ、他の諸民族を吸収するという傾向が生ずる。これらの吸収された民族は、自分たちの言語を失い、他の言語——有力な民族の言語か混成語——を採用するようになる。

だが、この傾向は逆の傾向に出会う。われわれは、交通は民族よりもはるかにすばやく拡大し、人間の交通共同体は言語共同体よりもはるかに迅速に拡張する、ということを知っている。交通の発達は、すでに三つの大きな文化共同体を生み出している。これらの共同体の各々は、それぞれ固有の文化を発展させており、その基本線は共同体のあらゆる部分において同じ形で見出されうる。

世界の大部分を包括するこの三つの文化共同体は、その各々を支配する宗教によって分けるのが最も適切であろう。それらは、ほぼ六億の信者をもつキリスト教文化圏、二億五千万のイスラム教文化圏、近親関係にあるバラモン教も加えらるとほぼ七億に達する仏教文化圏である。

だが、これらの文化圏のうちのいずれも、きわめて多彩な言語と民族を抱えこんでいる。これら各々の文化圏の内部で、有

力であるような文化は民族的ではなくして、国際的である。

しかしながら、世界交通はもっと大きな影響を及ぼしている。世界交通はますますその範囲を拡大し、到るところで同一の資本主義的生産様式を支配的なものにしていく。このようにして、これら三つの大きな文化圏は、経済的に他の部分と一緒になっますます共通の文化をもった統一的な領域になりつつあり、民族と文化圏の間の境界もますます減少しつつある。それと同時に、統一的な世界語の必要もまた、ますます緊急なものとなるであろう。しかし、同時にわれわれはこの経済的基盤の上に聳え立っている上部構造が、まさに正反対の方向を生み出していることを知っている。つまり、民族感情が力を失うどころか、むしろ何倍にも強化され、後れた民族が次々と無意識の段階から民族的自覚の段階へと進み、独自の民族文学を作りだし、それによって自分たちの民族性を最も強固なやり方で確実なものにしようとしているのである。

見たところ、この二つの相互に全く矛盾した傾向は、お互いに完全に相入れないように見える。だが、しばしばそうであるように、ここにおいてもまた外見は当てにならないものである。同じ原因が、二つの相互に全く矛盾する運動を生み出すことがある。もし私が石をひとつの水の中に投げ込めば、それは直ちに垂直に底に沈んで行くであろう。しかし、同時に、それは水の表面に円環と波状の水平に伝わる運動を生み出し、それは石がとっくに水底に達して、一切の運動がなくなってしまう後に

なってもなお、しばらくは止むことがないであろう。

この場合には、二つの別種の運動の関係を見抜くことは、きわめて容易である。それに対して、すべてが無数の個人の意識から成り立っている社会運動は、はるかに複雑である。すべての人がその願望を自覚しているが、多くの人々はその能力の範囲と種類を自覚せず、すくなくともその願望の真の原因を知らないからである。それは、一目見たところでは、経済的事件と精神生活をいつでも相互に結びつけることが不可能に見えるからであり、しばしば一方が他方から完全に独立しているように見えるからである。しかし、マルクス主義の方法を用いてより深く見れば、この二つの運動の相互関係、精神運動の経済運動への依存関係が、たとえ一方の運動が他方の運動に矛盾するような方向を打ち出しているところでも、いつでも明らかに見えてくるのである。

言語共同体と民族の発展が、文化共同体の発展と一致せず、後者の領域がやがて前者のそれを凌駕してしまうとすれば、そのことは必然的に人類がいつまでも一言語だけ話しているわけにはいかないということの意味している。人はいくつかの言語を学び、マスターすることができ、交通がたくさんある民族を会わせる所では、このことはしばしば劇的に起こりうる。かくして、コンスタンチノープルには、一ダースもの言葉を自由に操ることのできる人々がたくさんいるのである。

だが、二つの民族の全員が緊密な不断の交通共同体の中にあ

るところでは、そこから生ずる二言語併用状態は単なる過渡的段階にすぎないであろう。すべての人が二つの言語を話している所では、ついにはなんらかの理由——たとえば、それがより豊かで、より有力な民族の言語であるか、あるいは一方が完璧な文学を生み出しているのに、他方がそれを欠いているというような——から、二つのうちの一方が普遍的に優勢な言語になるであろう。場合によっては、フランス語や英語のように、二つの言語から一つの新しい言語、混成語が形成されることもあるかもしれない。古い民族は、みずから死に絶えるとか、その文化共同体が勢力を失うとかいう理由からでなく、単に彼らが自分たちの言語を話すのをやめ、他の言語をより目的に適ったものとみなすことによって、消滅するのである。

だが、経済的発展の過程で、諸民族間の交易という特殊な職業をもった一階級——商人が生まれる。この階級が形成された所では、民族の全員が、経済的交通関係をもとうと思う他の民族の言葉を話す必要はもはやなくなる。商人が話すことができれば、十分なのである。商人の発生が民族の定住の開始とともに始まるのは、おそらくこのことと因果関係があるのである。住民の大多数が土地に縛り付けられている所では、少なくともその一部は遊牧生活を続け、民族相互間の交易を媒介しなくてはならない。だが、同時に定住は彼らの労働負担を増大させることによって、人民大衆の視野を狭くする。定住は他の民族からの隔離を進め、外国語を習得する必要性、意欲、可能性を減

少させる。商人とともに交通の不断の拡大の可能性を作りだし、商品生産の広がりによって経済的文化共同体の範囲をますます拡大するこの同じ経済的發展が、民族を固定し、他の民族から鋭く隔離するのである。

社会的發展の一層の進展は、都市を作りだし、その中に知識階級のサークル——元来はほとんどが土地所有貴族であるが、彼らは田舎の閉鎖性と素朴さの代わりに都市の活発さを持ち込み、芸術と科学を享受し、市町村の統治と行政の活動に専念していた——を生み出した。これらのサークルの中では、科学的な精神、すなわち事物のより深い関連についての探究の精神が、したがってまた変革の精神が目覚めた。大都市では、商業の影響のもとに、社会的發展が田舎におけるよりもより急速に進展し、階級対立もますます激しくなり、より鋭く意識されるようになる。新しい社会的・政治的形態を求める努力が生まれ、他方で、権力者にとっては、現存するものをあらゆる理由を用いて弁護する必要が生ずる。なぜなら、現存するものもはや自明のものとも自然なものとも思われないからである。そのような雰囲気の中で、他の諸民族との商業交通は、知識階級にも反作用し、これら諸民族との交通に対して、純粋な商売上の利害関心以外の関心が呼び覚まされるにちがいない。人は外国により高い知恵、技術、模範、先例を求める。あるいは、外国を少なくとも比較によってそこから新しい洞察や芸術的印象を引き出すための、自然のような観察と研究の対象とみなしている。

外国人との交通は、ますます知識階級の欲求となり、彼らはこの欲求を一部は旅行によって、一部は入手した外国の文学的・科学的文献の研究によって満たすのである。

交通が拡大し、都市が成長し、芸術、科学、政治がとりわけ知識階級によって推進され、人民大衆の素朴で粗削りの芸術、人生知、政治から離れてくればくるほど、より高度の教養は、商業交通に従って国際的性格を帯びるようになり、商人のような教養ある人々はいくつもの言語を操ることが必要となり、自国語の知識だけで済ますことはそれだけ不可能になる。

いくつかの民族の間に、長期にわたる緊密な交通共同体および文化共同体が存在する所では、一民族、あるいは二、三の民族が、経済的、軍事的、科学的、芸術的により高い業績をあげることによって優位をかちえている。そのような民族の言語が、この国際的文化圏内に住むあらゆる商人、あらゆる教養ある人々が知らなければならぬ言語となる。そのような民族の文化——経済、芸術、文学——が、その文化共同体全体の性格を決定する。古代の終わりに、ギリシア語とラテン語が、地中海という盟の中でそのような役割を演じた。イスラム教の世界では、アラビア語がその役割を演じ、キリスト教文化圏においては——もちろん、ユダヤ人や無神論者をも含めて——ドイツ語、英語、フランス語が世界語となっている。この文化圏の教養ある人々は誰でも、どの民族に所属しておろうと、フィンランド人、ポルトガル人、ノルウェー人、ブルガリア人であろうと、およそ

近代文化を享受しようと思ふならば、少なくともこれらの言語のうちの一つを知らなければならぬ。そして、これらの文化圏に住む諸民族の一つの科学的、文学的、政治的業績のいずれも、それが初めからこれらの言葉の一つで書かれていない場合には、三つの世界語の一つに翻訳された時初めて、近代文化の構成要素となるのである。

経済的、政治的發展が、これら三つの言語に、さらに四番目の世界語を付け加えらるれば、それはロシア語であろう。しかし、同様にして、これらの言語のうちで、英語が唯一の国際語になるということもありうるかもしれない。英語は、単にいわゆるキリスト教文化圏内部に最も広く普及しているだけでなく、ますます仏教—バラモン教文化圏およびイスラム教文化圏に住む教養ある人々の言語ともなっている。世界語の中では、英語の領域が最も急速に拡大している。一九世紀の初めには、二千万人をいくらか超えるイギリス人、三千万人のフランス人、ほぼ同数のドイツ人(国籍からでなく、言語から見た場合)がいた。ところが、今日では四千万人をいくらか超えるフランス人、七千万人を超えるドイツ人、一億二千五百万人のイギリス人がいる。

このように商人および知識階級の人々による世界語の流布という形を通じて、諸民族の国際文化共同体への結合がなされてきたのである。そして、この結合が今日ほどに緊密で、また、純粋な民族文化の可能性が今日ほど小さい時代は、今までにな

いことである。

オットー・パウアーがいつでももっぱら民族文化についての語り、人民大衆に民族文化を所有させることが社会主義の目的だ、と主張するのを聞くときわめて奇妙な感じがする。

だが、民族文化の説明のためにパウアーが挙げた実例を吟味してみると、「民族的なもの」は、あらゆる民主主義的、社会主義的運動にとって言語の別なく共通な「大衆的なもの」であることがわかる。

彼は労働者階級の社会政策について次のようにいう。

「労働者保護立法と労働組合の闘争、すなわち賃金引き上げ、労働時間の短縮は、広範な人民大衆を民族文化共同体の成員にするための不可欠の前提である。それゆえ、一九世紀は、労働時間の短縮を求める英雄的大闘争、メーデーの大運動以上に強力な民族的行動を知らないのである」。

「だが、労働者階級は、この闘争の成果がどれほど大きなものであれ、資本主義社会においては、彼らが民族文化の完全な所有に到ることは決してない、ということを知っている。社会主義社会が初めて、民族文化を全民衆の所有にし、それによって全民衆を民族にするのである。それゆえ、すべての進化的—民族政策は、必然的に社会主義の政策である」(一六四、一六五ページ)。

このような推論の無力さを示すためには、「民族文化」という一般的な表現の代わりに、ある特定の民族の名前をおけば十

分である。

「賃金引き上げや労働時間の短縮は、スロベニア人の人民大衆がスロベニア文化共同体の成員になるために不可欠である。……社会主義社会が初めて、スロベニア文化を全スロベニア人民の所有物にするのである」。

スロベニア民族の代わりに、たとえばドイツ民族かフランス民族を置いたとしても、多少奇妙な感じが減るだけで、事態はあまりよくならない。スロベニア人、ルテニア人、ルーマニア人のプロレタリアートが手に入れようと努力している文化は、ドイツ人、フランス人、イギリス人が獲得しようとしている文化は、文化と同じものである。つまり、それは近代国際文化であり、各々の民族文化は、最も進んだ文化民族の文化といえども、近代国際文化の一素材にすぎないのである。今日では、民族文化は近代文化の全体を享受しようと思う人にとっては、もはやどこでも十分ではない。民族文化以上のものを理解することができるとためには、いくつかの言語に精通していること、少なくとも一つの世界語に精通していることが不可欠である。

われわれの経済と科学が国際的になつていくということ、それゆえ少なくとも世界語の一つに精通していない人は、それらを追跡していくことも、概観することもできない、ということは何人も否定しようとはしないであろう。だが、まだ最も明確に民族的性格を示しているとされる領域、つまり大衆文学の領域——ここでは言語の形態が最も重要となり、言語が単に意志

疎通の手段であるだけでなく、芸術的效果をねらう手段でもあり、人が今なお最も容易に民族的特性について語ることでできる領域であるが——そこにおいてもはや単なる民族文化で満足することは不可能である。ここにおいてもまた、人は近代文化の影響を完全に享受しようと思えば、世界文学を知らなければならぬ。ここで言語形態がもっている重要性のゆえに、また各々の言語の特性のゆえに、翻訳はまさにこの領域では、不十分な代用品にすぎない。しかも、この代用品ですら、わずかの読者層しかもたない小民族においては、きわめて不十分な程度にしか行き渡らないのである。人が近代文化と歩調を合わせようとするれば、ここにおいてこそまさに世界語の知識が必要になるのである。多くのすぐれたドイツ人がいて、近代文化のために大きな業績を挙げたが、最近半世紀のドイツの民族的大衆文学は、たとえばゾラ、モーパッサン、イブセン、キールラント、ツルゲーネフ、トルストイほどの影響力を彼らに及ぼすことはできなかった。ゲーテやシラーに感動しうる人は、おそらくそれに劣らずシェークスピアにも感動できるであろう。

もし社会主義社会が人民大衆を教養ある人間にすることに成功した時には、社会主義社会は彼らに、単に個々の民族的言語共同体の特殊な文化だけではないに、数種の言語、世界語を自由に操り、かくして、われわれの文化圏の国際文化のすべてに参加する可能性をもまた与えることになる。

もしわが文化国家の住民大衆が、自国語だけでなく、あと一

つか、あるいは数種の世界語を自由に操ることができるといふような状態にひとたび達するならば、その時にはまた、さしあたりより小さな民族の言語が徐々に衰退し、やがて完全に消滅し、ついには、すべての文化的人類が一つの言語、一つの民族に統合されてしまうという基盤が生み出されることであろう。ちようど東地中海の諸民族が、マケドニアのアレクサンダー大王の時代以来ヘレニズム世界に統合され、西地中海の諸民族が、後に一つのロマン民族に融合してしまったように。

われわれの文化圏内部の言語の相違が、この文化圏に属するさまざまな民族の成員相互の意志疎通を困難にし、文化的発展の障害となっている。ただ社会主義のみが、この障害を克服できるのであるが、しかし、社会主義がこの点で目覚ましい前進をなし遂げるほどに国民大衆全体を高度に教育することに成功するまでには、社会主義は長い間活動しなくてはならないだろう。

しかし、今日すでにわれわれは次のことを知らなくてはならない。われわれの国際主義は、ブルジョア民族主義のように攻撃的ではなくして自民族のために要求するのと同じ権利をあらゆる民族に与え、さらにすべての民族に完全な主権を認めるといふ点でのみブルジョア民族主義から区別されるような特殊な種類の民族主義ではない、ということ。個人に関するアナキズムの視点を、そのまま民族に移しかえたこのような見解は、近代の文化的諸民族の間に存在する緊密な文化共同体に適合す

るものではない。これら諸民族は、実際には経済的、文化的に一つの社会体をなしているものであり、その繁栄は各部分の調和ある協力——それは各々の部分が全体に従う時にのみ実現するのであるが——いかににかかっているのである。社会主義インターナショナルは、他民族の平等権を犯さないかぎり、好きなことは何でもなしうる至高の諸民族の集合体ではなく、一つの組織体であって、その各部分がお互いに容易に理解し合うことができ、共通の計画に従って心を合わせて行動することができればできるほど、それだけ完全に機能しうるものなのである。

おそらくオットー・バウアーの見解もこれと同じものである。だが、彼の見解は民族文化と民族主権の強調の背後に消えてしまっている。しかも、これが民族に関する一般理論を扱っている社会主義文献の中で際立っている民族問題の一側面なのである。

彼にあっては、時折民族的契機の強化へと導く民主主義運動のあの側面のみが影響を及ぼしているのである。

四、民族国家

われわれは、商人と知識階級とが国際的文化共同体の仲介者となる、ということを見てきた。だが、同時に彼らはまた、同程度に強く民衆の中に浸透している民族意識の主要な担い手でもある。そして、この民族意識の中で国際的な交通や国際的文

化共同体が発展していくのである。

生産が商品生産になればなるほど、個々人が個人的な交通、個人的な記憶や慣習、暗算——すべての農民経済が父祖伝来のやり方で生産し、本質的には農民の必要とするものはみずから生産するかぎりですべてで十分なのだ——などで間に合わせることはそれだけ少なくなる。今や、紙の上でのみなしうるような複雑な計算をすることが必要となり、権利や義務を紙の上にしつかりと書き留め、文書を書いたり、読んだりすることができ、文字による通知を出したり、読んだりすることができなければならぬ。手紙、カレンダー、新聞なしには、農民といえども今日もはや暮らしていくことはできない。

以前には、息子は父の仕事場で、娘は母の台所で生きていくために必要とされる全てを学んだとすれば、今日ではそのために学校が必要である。学校は、以前は有産階級の特権であったが、今日では全国民の一定程度の学校教育は、社会の繁栄のための前提条件となっている。しかし、この教育はきわめて貧弱なものにすぎず、大衆は外国語習得のための時間をもっていない。高等教育がいつでも外国語の外に重要な文化語の習得のために奉仕するとすれば、小学校は初めから純粹な民族教育である。大衆は自国語で授業を受ける以外のことを望みもしないし、望んでも不可能である。大衆は、即座に理解できる自民族の教師を望んでいる。

しかしまた、生産と学問の発展とともに、一般大衆の中に教

師以外の他の知識人に対する需要が生ずる。とりわけ、小所有者、農民、小商人、手工業者のところでは、弁護士に対する需要が、すべての人のところで、医師に対する需要が生ずる。これらの人々とは、大衆は自国語を話す時のみ、意志疎通することができぬ。

だが、そのうちに大衆の間への読み書きの知識の普及とともに、より高度の文化に——それが文字や印刷によって流布されているかぎり——すくなくとも幾分かは参加する可能性が生まれる。

この文化は国際的であるが、たった一つの言語しか知らない人民大衆は、言語的文化が民族的外衣をまとっている場合にか、この文化を享受することができない。国際文化の中の言語的作品は、大衆のレベルまで下がって、彼らに知られ、受け入れられる前に、まず民族的著述家によって受け入れられ、翻訳されなければならぬ。

かくして、商品生産の進展とともに、大衆の中に自国語を話す知識階級、つまり民族的知識階級に対する需要が増大する。そして、言語的文化に対する需要は、その内容がどれほど国際的な性格のものであろうとも、形式上は民族文化に対する需要という形をとるのである。

民族の中に民族的知識階級に対する需要が生ずると、今度はこの階級の中に大きな知的レベルの高い民族に対する需要が生ずる。自分が所属している民族の大きさは、資本主義的生産様

式の中で生きている成員の誰にとってもどうでもよいものでは決してなく、ましてや近代的諸階級にとって、したがって賃金労働者にとってもどうでもよいものではない。労働者階級にとっても、他の条件が同じであれば、民族が大きければ大きいほど好都合なのである。彼らの移動の自由の領域が、それだけ拡大するからである。むろん、労働者はこの領域を越えて移動し、賃労働を見出すことができようが、資本家には従属しなければならず、自分の言葉が話されていない地域では、仲間たちと意志疎通しあうことも困難である。全く同様に、資本家にとってもまた、大民族——ここではまだ国家については語っていない——に所属している方が有利である。自国語を話す人々は、外国人からよりも自国民から買うであろう。しかし、ともかく言語の障害は克服され、プロレタリアートもまた他民族の中になんとかやっていくのに必要な程度の外国語は容易に身につけるであろう。

だが、自民族の大きさに対して、これら二つの階級よりもはるかに大きな関心を抱いているのは、知識階級である。彼らにとって、言語は社会交通における単なる意志疎通の手段以上のものであり、最も重要な道具の一つであるだけでなく、しばしば交換不可能な唯一の道具なのである。資本家とプロレタリアートは、自分の言うことを聞き取ってもらうのに必要な程度の外国語は苦もなく習得してしまうのであるが、知識階級にとつては、ほとんどの場合これだけでは不十分である。詩人であれ

演説家——これは今では政治家、法律家、聖職者の形をとっているが——であれ、彼らは自分の言葉をできるだけ力強く、繊細に、豊かに、快い響きをもって操らねばならない。科学者もまた差異を明確に、かつ正確に表現できるよう言葉を使いこなすことができなければならない。言葉の使い方が巧みであればある程——もちろん、他の条件が同じであれば——知識人の成功はそれだけ大きくなる。わずかの特別に天分豊かな人々を別にすれば、人がある言語に熟達するのは、彼がそれを子供の時から学んできた場合に限られる。それゆえ、今日の教育においては、人は通常母語の達人になるだけである。知識階級の人々は、国際文化の産物をわがものにしようと思えば、外国語を学ばなければならない。しかし、彼自身がこの文化に貢献しようとするれば、それはほとんどの場合もっぱら母語を使って行われる以外にない。それゆえ、彼の聴衆はさしあたり、自民族の人々だけである。大民族のメンバーであるか、その言語が世界語になつていくような民族の知識人は幸運である。後者の場合には、全世界に向かつて話すことができる。それに反して、小民族に所属し、そのうえ自分たちの仲間の中にほとんど知識人をもたないような後進的な貧しい民族の一員である知識人は、なるほど外国語の習得によって国際文化を完全にわがものとすることができるのであるが、しかし、文化へのみずからの貢献という段になると、それがどれほど天才的で、圧倒的なものであろうと、ほとんど聴衆を見出すことはないであろう。さもなくば、

彼は自分の精神の産物を不完全にしか表現できないにもかかわらず、外国語を使うよう強制されるのである。

それゆえ、知識人ほど——特に彼が小民族に生まれた場合——自民族の強大さを熱望する者はいない。最も多く外国語を学び、最も多く国際文化の影響を受ける知識人こそが、最も強く自国語の純粋性、その通用範囲の拡大、外国語作品の撃退を唱えるのである。要するに、民族の中の最も国際的な分子が、また最も民族的な分子なのである。

民族感情は、資本主義的生産様式や国際交通の増大という要因に由来する近代国家の登場によって、一層強化される。

中世にあっては、国家はたくさん州や県、マルク共同体から成っており、それらは自治的で、経済的にも独立しており、従属というかぼそい糸によってのみ国家権力と結びついているにすぎなかった。これらの小さな共同体の各々では、当然のことながら、たった一つの言語が通用していた。しかし、このことは国家を構成している共同体のすべてが、同じ言語を話しているというのを、少しも必要とはしなかった。国家権力は、個々の県や州の内政とほとんど関係をもっていなかった。そのような多言語の存在ははつきりした不便をひき起こさなかったのである。戦争の時でさえ、これらの小さい共同体に割り当てられた兵士たちは、自分たちだけで一緒に戦い、そのうえ、戦術がまだそれほど発達していなかった。軍隊相互や将校との連絡に必要とされる絶妙なる軍隊の展開が戦闘の間に必要

になったことであろう。同様に、軍隊は多言語状態がその戦列の中を支配している時でさえ、難なくその任務を遂行することができたのであった。

資本主義が貨幣経済をもたらし、個々の州や県がより緊密な相互の経済的交通の中におかれ、同時に小共同体の自治の代わりに、中央集権化された有給の官僚機構による行政が登場し、封建家臣軍の代わりに有給の正規軍が登場した時、事態は一変した。もちろん、後者はさしあたりはなお多言語状態に耐えていた。なるほど当時、軍隊はたくさん兵科に分かれ、さらにその各々が計画的に協力しあわなければならない細別科に分かれており、戦闘の間その各々は、軍司令官の命令に従って種々さまざま、しばしばきわめて絶妙な軍隊の展開をしなければならなかった。しかし、ともかく軍隊はいつでも絶えずあちこち移動して行かなければならない緊密に結びついた団体であり、一つのメカニズムではあるが、有機体ではなく、前もって練兵場において入念に訓練された単純にして、型にはまった、絶えず繰り返される性格の運動は、当該司令官の命令が発せられるやいなや、直ちに遂行されたのである。司令官の言葉と高級将校の言葉は、統一されたものでなくてはならなかった。しかし、その他の点では、すべての兵士はどんな言葉でもいつでも自由に話すことができた。

現在では、司法、警察、経済、税関事務、交通業務、徴税事務、等々といったような最も重要にして、最も多様な業務に従

事している官僚たちには、しばしば長期にわたる意見交換や報告が不可欠なので、一言語状態がはるかに重要なものとなっている。もし全官僚機構が一言語状態でなかったならば、それは国家業務の果てしなき困難と障害を意味した。それゆえ、中央集権的官僚的絶対主義は、いたるところで国家行政における一言語状態を求めて努力したのであった。

だが、官僚たちは単にお互いに話し合わなければならなかっただけでなく、住民とも話し合わなければならなかった。特に警察国家の活動は、一步ごとに住民の中に入りこまねばならなかった。そのため、国家の代表者は、住民の言葉もまた理解できなければならなかった。今や官僚組織の一言語状態と並んで、全民衆の一言語状態が重要になった。

それゆえ、すでに一八世紀の絶対主義国家は、その領域内ではたった一つの言語のみが話されているような民族国家になることを目指して努力していた。この国家は、その帝国の支配的な言語が話されている地域で、最も好んでこの改革運動を行った。他方で、この国家は、その臣民の中で支配的言語に熟達していない人々に対しては、とりわけ学校という手段を用いて、それを強制することを目指した。当時人は——多くの官僚たちは今日でもまだ——学校というものは支配者が必要とするような形に人間を作り変えることができると信じていた。しばしば、意図された民族的画一化は達成されたが、もちろん、それは学校によってではなく、国家内部の交通の力によってであった。

だが、交通が他の言語共同体の成員を支配的な言語の使用へと誘引するほど強力でない所では、言語的画一化を目指す官僚たちの努力は、彼らの意図とは逆の結果をもたらした。外国の諸民族は、今や抑圧され、迫害されていると感じた。支配的な言語による授業は、授業について行くことのできない子供たちにとってはただ力と時間の浪費を意味するにすぎず、彼らが是非とも必要としている真に有用な授業を不当に遠ざけておくものであった。さらに官庁や裁判所において、支配的な言語で物事が処理されるならば、他民族の成員は同様に不利益をこうむることになった。そのうえ、当然のことながら、諸民族の完全な同権が実現した場合でさえ、官僚機構の内部でも、その言語が国家語となっている民族の成員は、他の民族の成員よりもはるかに優位に立っていた。なぜなら、彼らは他民族出身の同僚が苦心して身につけなければならぬ言語を初めから自由に操ることができたからである。しかも、彼らにはあらゆる教育手段が初めから開かれていたが、他民族の成員には、国家の支配的言語を習得することに同意しないかぎり、それらが閉ざされていたのである。手工業者や農民の息子たちの官僚への立身は、国家語を話さない民族にとっては、極度に困難になった。

かくして、民族的に雑多な住民の住む国家内部のそのような諸民族の中に、国家に敵対的な雰囲気が生ずる。しかし、それはあらゆる国家に対する敵対ではなく、自分たちの住んでいる国家に対する敵対であり、その国家から離れて、独立した民族

として——場合によっては、近隣の国家で同様な運命を甘受している民族同胞と共に——独立した国家を組織したいという努力である。支配民族における同じように、支配されている民族にも、民族国家への衝動が生ずる。

この衝動は、資本主義が一定の高さに達すると必然的に発生する民主主義運動の興隆により一層強化される。それは、一部は国家権力を自分たちの支配下に置こうとする資本家階級の努力から、他方では、働く階級、すなわち手工業者、農民、賃金労働者の教育の向上、彼ら間の交通の増大、郵便制度や新聞の発達によって促進される。それらは、徐々に彼らの地域的偏狭さを克服し、国家の政策のみならず世界政策についてさえも関心を抱かせるのである。

かくして、民主主義運動は、一方では、官僚機構をより小さな行政単位の自治によって置き換えようとする努力を生み出し、他方では、国家の官僚機構がそうした方法で置き換え不可能な場合には、中央議会の力によってコントロールし、支配しようとする努力を生み出す。

官僚たちと違う民族に所屬している民衆が存在する所では、今や両者の間の対立は激化する。他方で、議会を求める努力は民族的議会を求める努力となる。なぜなら、そのような議会のみが民族の要求を正当に評価することができ、そのような議会においてのみ、民族は正当な発言の機会を得ることができらるである。官僚機構が遅滞や障害なしに機能しうるためには、

一言語メカニズムでなければならぬように、その名称が話し合いに由来する議会もまた一言語でなくてはならない。もちろん、人は誰でも議会において自分の好きな言葉で演説することが認められている。しかし、その演説が聴衆の多くによって理解されない時、それは一体どのような効果があるのだろうか。議長が、話されていることを理解できず、議員の一部も他の議員たちが話していることや議長が指示していることが理解できないとすれば、有益な討論や規則正しい業務の執行は、いかにして可能であろうか。

われわれの多くの国際会議においてすでに、討議の困難は巨大なものである。だが、そこでは出席者の多くが話しており、議長の手が知っている三つの世界語で討論され、しかも、八日間にわたって一般原則についてのみ討論されるだけである。だが、最初の人がハンガリー語で話し、次の人がクロアチア語で、第三の人がルーマニア語で、第四の人がドイツ語で話すというような議会を想像してごらん下さい。誰も他の人の言うことを理解できず、議長はただハンガリー語のみに精通しているという場合もありうる。しかも、本会議においてのみならず委員会においても、すべての討論参加者が初めからかなり情報を与えられている一般原則のみならず、複雑な法案の個々の条項について、年に二百日も討論しなければならぬのである！

しかし、単に住民と民主主義的原則の立場からだけでなく、政府そのものの立場から見ても、今日の議会政治と民主主義の

時代においては、国家が民族的に統一されると言うことが、官僚的絶対主義の時代よりもはるかに不可欠になっている。

政府の困難と課題は、近代国家においてますます増大しており、統一的な官僚機構もいっそう必要になってきている。だが、民族的な衝突と野心がますますこれを解体してしまいそうである。そして、彼らにとって不都合な民主主義は、不利な立場に置かれている民族のナショナリズムと出会ったところで強化される。最後に、軍隊にとってもまた言語の統一性がますます必要になる。現代の作戦では、小部隊はますます自立し、その各々が変化する諸関係にすばやく適応することを強いられるようになる。軍隊は、メカニズムから有機体になる。それは、巨大ではあるが鋭敏な有機体であり、その活動は大部分、将校が兵士に対して二、三の命令を発すれば済むというようなものではなく、将校と兵士とが互いに了解しあい、相互にその観察結果を伝達しあうことによって成り立っているのである。しかも、将校が自分の部下たちと意志疎通しあっているだけでは、決して十分ではない。現代の戦闘観からすれば、連隊は容易に相互に入り乱れて移動しあうものであり、将校は自分の部隊から引き離され、他の部隊と結びつけられる。もし連隊ごとに違う言葉話を話していたら、どれほどの困難が生ずることであろうか！

われわれは、ここで本を書くことはできないので、近代国家において言語の統一性を獲得することが、どんなに重要なことであるかについて若干の暗示をすることで満足しなければなら

ない。そこから明らかになることは、国家がたった一つの民族から成っているということがどれほど重要なことであるか、また他方で、あらゆる民族が自分自身の国家を組織しているというものがどれほど重要なことであるか、という事実である。

残念ながら、オットー・バウアーは民族と国家にとっての言語の重要性を十分に考慮に入れなかった。彼は、民族国家創設の衝動の中に、ただ単にあらゆる外国支配を拒否したいという欲求、ならびに国内市場の拡大を求める資本主義の欲求のみを見た。そして、最後に、彼はその中に、国家を合目的に形作るうとし、したがって国家を人為的構成物、民族を自然の産物とみなし、国家を民族に適合させようとした市民階級の革命的合理主義の活動を見た。

これらすべての動機が共に作用しているのは確かであるが、近代政治生活における民族性原理の強力な力を説明するには、これだけでは十分ではない。国家に対して言語がもっている極端な重要性を考慮に入れる人々のみが、民族性原理がわれわれの時代の政治の中で行使する荒々しい力を完全に理解できるのである。

しかし、オットー・バウアーが民族国家を打ち立てようとする衝動の力を過少評価したのは、なんら偶然ではない。彼の愛は多民族国家に向けられていたのである。多民族国家を生活能力のある、住み心地のよい国家に作り変えることが、彼の熱心な努力の目的であり、民族の本質と活動についての彼の研究は

もっぱら、この目的のために捧げられているのである。

五、多民族国家

民族国家は、近代的諸關係に最も照応した国家形態であり、この形態の中で、国家はその課題を最も容易に果たすことができるのである。だが、すべての国家がこの形態に到達しているわけではない。近代的生産様式の中に、封建時代からの、いやそれどころか原始共産主義時代からのたくさんの経営形態が残存してきているのと同じように、国家が多様な民族分子から構成されていた時代の名残りもまた、力の損失や極度の内的摩擦や対立なしに残っている。民族国家でさえ、古い多民族国家の時代の名残りを今なおさまざまに背負っている。だが、それとならんで、完全に多民族国家のままにとどまっている国家がある。

それは、その内的な形態が、何らかの理由から、時代遅れのものか、変則的なものにとどまっているすべての国家である。トルコとロシアにおいて、このことは明白である。だが、それはまた、二つの経済的に進んだ国、ベルギーとスイスにも当てはまる。両者ともに中立国であるが、両者の存在は——トルコと同様——少なからざる部分、隣国がこれらの国を他国に与えたくないという事情に依っているのである。このことは、特にベルギーに当てはまる。フランスとオランダはともに、一七世紀と一八世紀にベルギーを手に入れようと望んでいた。もし早

めに、たとえばすでに一七世紀にベルギーが、フランスの領有になっていたらとすれば、おそらくベルギーは完全にフランス的性格を身につけたことであろう。反対に、当時ベルギーが永続的にオランダの所有になっていたらとすれば、フラマン人はオランダ人と一緒になって一つの統一民族を形成し、ヴァロン人はおそらく吸収されてしまったであろう。だが、フランスはベルギーを他国に与えることを望まず、フランス自身もベルギーを自分のものにするのを、他の強国の嫉妬によって妨げられたのであった。なぜなら、もしそんなことになったら、フランスの力はとてつもなく強化されてしまうことになったであろうか。とりわけイギリスは絶えずそれに反対行動をとらざるをえなかった。なぜなら、アントワープはヨーロッパ最大の港の一つで、まさにテムズ川の河口の対岸に位置していたからである。この港とシュルデ川の河口を手に入れた大国は、フランスにとって危険な隣人になる。なぜなら、そこからほどフランスを効果的に攻撃できる場所はないからである。かくして、ベルギーは強国の玩弄物として、小さな独立国にとどまらざるをえなかった。民族国家へのベルギーの併合という意図は、実現することはなかった。ベルギーはフランスとオランダの間であちこちに引き裂かれ、半分はフランス人に、半分は低地ドイツ人とどまっている。その七百万の人口のうち、四二パーセントがフラマン語のみを話し、三八パーセントがフランス語のみを話している。

スイスはそれほどひどく隣国の玩弄物とはなっていないが、隣国の嫉妬心を別にしても、スイスの独立は、かなりの貧しさ、大部分の地域の近寄り難さとともに、住民の戦闘能力によって保持されていた。しかし、まさにこの近寄り難さこそが、スイスの政治的發展を阻害してきたのである。同志レンナーは、オーストリアを「君主制スイス」——頂点にフランツ・ヨーゼフを頂いた共和制——に変革したいと望んでいる。だが、彼はその各々が今なお独自の法制度をもっているようなカントン〔州〕の主権をも我慢して受け入れようとするのか。まさにオットー・バウアーとレンナーとが、正当にもあれほど激しく論難したものの、「歴史的・政治的個別性」の連邦制、すなわち、オーストリア流の言い方からドイツ流の言い方に変えれば、封建時代から受け継がれてきた祖国の国家形態——王国、公国、大公領、辺境伯領、伯爵領からなる連邦制、その最高度に發展したものを、彼はスイスの中に見ている。スイスは、封建時代から維持されてきたほとんど至高の主権をもつ小国の連合体であって、決して民族の連合体ではない。

スイスは、国内に民族的あつれきをもたない多民族国家として存在している。なぜなら、スイスはまさに近代国家でもなければ、一元的な行政をもった統一国家でもないからである。その軍隊でさえ、カントンの権利制限にもかかわらず、個々のカントンの分担保から構成されていた封建時代の軍隊を今でもいっくらか思い出させる。

だが、ベルギーもスイスも民族関係に関しては、オーストリアよりもはるかに有利な状況にある。二、三のごく小さい民族的破片を別にすれば、ベルギーにはたった二つの言語があるだけであり、スイスには三つの言語があるだけである。しかも、二つのベルギーの言語のうち、一つはすべての知識人が初めから習得しなければならない世界語である。事実また、二つの言語に精通しているのは百万のベルギー人がおり、おそらくその多くはフラマン人である。三つのスイスの言語のうち、二つは世界語であり、他の一つのイタリア語は、第一級の文化語である。これらの言語の一つをマスターした人は誰でも、豊かな文化財を享受することができる。二つ、あるいは三つ全部の国語の知識は、そこではなんら負担ではなく、事情が許す限り、すべての人が求めている利点なのである。それゆえ、軍隊においても、連邦議会においても、裁判所でも、学校においてさえ、言語的分離はなんら困難なこととは感じられていない。つい最近アルベルト・ドーザは、『ヨーロッパ通信』(十月一八日号)において、ドイツ語とフランス語の言語境界にあるスイスの市町村について報道している。そこでは、以前はフランス語を話していたが、今ではドイツ語を話し、学校の授業と説教は旧来のやり方で依然としてフランス語で行われている、ということだ。二重言語状態が広く普及しているがゆえに、そのようなことは、いかなる困難も引き起こさないのである。

ロシアでは事態は異なっているが、それでもオーストリアに

おけるよりはいくらか簡単である。ロシアはたくさん minority 民族をかかえた中央集権的巨国であるが、その中核、人口の圧倒的多数をなしているのは、ロシア人であり、他の諸民族は概して帝国の周辺に住んでいる。ヨーロッパ・ロシアの人口のうち、八千四百万人がロシア人であり、それに対して、八百万人のポーランド人、五百万人のユダヤ人、三百万人のリトアニア人、ほぼ同じ数のフィンランド人、二百万人のドイツ人、百万人ずつのルーマニア人とアルメニア人等々が向き合っている。ロシアは、これらの民族にかなりの自治を与えることができるであろう。ともかく、彼らが一つの纏まった地域に住み、中心国から切り離されていて、その存在にいささかの脅威も与えない限り、自治は可能である。

オーストリアでは、事態は全く違っている。オーストリアは、民族の数の多さでスイスやベルギーと異なっている。そこには、九民族が住んでいるが、チェコ人と並んでスロバキア人を、クロアチア人と並んでセルビア人を別に数えるならば、十一民族になる。これらの民族すべての言語の中で、ただ一つドイツ語のみが世界語であり、これのみが国際的な偉大な文化財への道を直接に開いてくれるのである。

しかし、ロシアと異なってオーストリアには、数の上で他の民族に対して圧倒的な優位に立っている民族はいないし、帝国の中心部に住んでいる民族もない。そこでは、ドイツ人が千百万人、ハンガリー(マジャール)人が九百万人、チェコ人と

スロバキア人合わせて八百万人、ポーランド人とルテニア人がそれぞれ四百万人、ほとんど同数のセルボクロアチア人、ルーマニア人が三百万人、スロベニア人が百万人以上、イタリア人がほぼ百万人を数える。後の方に挙げた諸民族は周辺部に住んでいるが、三つの大民族、ドイツ人、マジャール人、チェコスロバキア人は、それぞれ帝国の中心部にまで達している。ウィーンの近郊、プレスブルク(ブラチスラバ)で、三者は角を付き合わせている。ヨーロッパのあらゆる多民族国家の中で、ヨーロッパ・トルコを別にすれば、民族問題に関してオーストリアほど困難な状況にある国はない。しかし、オーストリアが多民族国家の典型をなすものではない。およそ多民族国家に典型はない。それぞれが、全く独自の事例なのである。オーストリアは、民族問題を最も紛糾した、最も困難な形態で抱えこんでいるのである。

六、オーストリアの未来

オットー・バウアーは、民族問題を一般的な形では取り扱っていない。それは、困難な事であったろう。彼はただ「ヨーロッパの大きな多民族国家の中で最も発達している」オーストリアの諸関係を分析したにすぎない。この分析が、分量からいっても、内容からいっても、彼の著作の主要部分をなしている。これが、この著作の最もすばらしい、最も円熟した部分である。オーストリアを理解しようとする人は誰でも、レンナーの著作

と並んでパウアーの著作をも研究しなくてはならない。

だが、私がここでオーストリアに関するパウアーの詳細な叙述の動因となったあらゆる思想を再現してみようとすれば、私は厚い本を書かなければならないであろう。それを私はここで断念しなければならぬ。なぜなら、私の書評はすでに過度に長くなっており、私が言わなければならぬ多くのことは、オーストリアの民族問題に関する私の以前の論文の中で私が詳述したことを他の関連の中で繰り返すことにすぎないからである。

それゆえ、私はオーストリアの生成と、その民族的諸関係の変化についてのパウアーの叙述を、まさにこの部分が彼の本の最良の部分であるにもかかわらず、無視することにする。私は、見たところ全く希望のないように見えるハプスブルク君主制の現状を克服すべく提案されている手段についてのみ考察することにしたい。

オーストリアの遙かな未来については、人は好きなように考えることができるにせよ——この点ではパウアーやレンナーと大きく異なっているのであるが——帝国の現在の権力関係においては崩壊を予測することはできない、というのが確かである。同様に、その民族的諸関係が耐えがたいものになっており、あらゆる社会的、政治的進歩を著しく阻害しているというのも確かである。

資本主義的生産様式のもとにおいては、あらゆる社会的有機体は、絶え間なく増大しようとする傾向をもっている。あらゆる

個々の企業体と同じく、あらゆる個々の民族も拡大しようとしている。しかし、民族国家においては、民族はただ国家の拡張によってのみ大きくなることができ、このことはヨーロッパでは今ではただ戦争によってのみ可能である。だが、同時にヨーロッパのブルジョアジーは休息を欲しており、革命を恐れている。そして、彼らは今日あらゆる戦争は革命を伴うということを知っている。このことが、現代の国家が皆可能な限り植民政策に移行し、その方法で自国の領土を拡大しようとしている理由の一つである。このことは、ヨーロッパ内部における膨張と違って、ヨーロッパ戦争なしに可能なのである。とはいっても、すべての国家が植民政策を首尾よく遂行できる状況にあるわけではない。すでにドイツは、その巨大な軍事的、経済的实力にもかかわらず、重要な植民地領有ができなかった。イタリアは、植民政策でみじめに難破した。同様に、ロシアも、その東アジアへの拡張政策に高価な代償を支払わなければならない。オーストリアは、その地理的位置から言って、これらの諸国よりもはるかに植民政策への能力を欠いている。オーストリアは、賢明にも植民政策をあえて試みようとはしない。

だが、多民族国家においては、国家領域の拡大のみが、民族の領域を拡大する唯一の手段ではない。それは、現在の帝国国境内部での他民族の撃退によっても、同様に起こりうるのである。

オーストリア内部の民族間闘争は、その権力者や諸民族の指

導階級の関心を植民政策から逸らせ、オーストリアが植民政策に突進しない原因の一つとなっている。だが、他方で、帝国の領土的膨張政策の失敗は、オーストリアの領域内部の諸民族の相互の膨張努力を極度に先鋭化させている。

このような状況の中で、オーストリア社会民主党が成長し、諸政党や諸民族の政治活動に関わりをもたなければならぬ政治勢力となった。それは、国家の存続を支持するものではないが、国家はそこにあり、次のヨーロッパ革命の勃発以前に消滅する気配は全くない。だが、社会民主党は、すぐやって来るはずと先になるか分からない、この革命の時点のためにのみ綱領を用意しているだけでは十分ではない。革命はいかなる場合も、社会民主党が随意に起こせるものではないからである。それゆえ、社会民主党は、実践活動のためにも、プロパガンダのためにも、現在のための綱領をもたなければならぬ。なぜなら、行為によるプロパガンダは、いつでも言葉によるプロパガンダよりも効果的であるからである。人が行為によるプロパガンダという表現を、悪行のプロパガンダとしてではなく、実り豊かな、熟慮された実践として理解してくれるならば。

今日すでに可能な改革を求めるそのような綱領は、しばしば多くの点でブルジョア政治家の改革綱領と一致する。だが、社会民主党は、現在の小さな日常活動においてもまた、ブルジョア政治家の中の最も影響力のある人々とは、まず彼らがその要求を提出し、主張する際の容赦のなさやエネルギーにおいて異

なっているだけでなく、あらゆる部分的改革の不十分さについての明確な認識によっても異なっているのである。部分的改革は、どれほど有益で必要なものであっても、絶えず所有階級の対抗運動を呼び起こし、新しい闘争と改革を必要とする。生産手段の私的所有の基盤の上でのいかなる部分的改革も、現代の生産様式の全体的性格を変えることはできないし、その中でプロレタリアートになんとか耐えうる生活を保障することもできない。

オーストリアのような国においては、社会民主党は他国の諸友党と共通の現在綱領に加えて、さらに民族綱領をもたねばならない。

プロパガンダと活動を考慮する以外に、社会民主党はまた組織問題をも考慮に入れなければならない。初めはオーストリアにあっては、ただドイツ人プロレタリアートのみが、社会主義的宣伝を受け入れるのに十分な発達段階に達していただけであったが、四十年に及ぶプロパガンダのうちに、国内の諸民族は次々と近代国際文化の圏内に入り込み、そのうちの各々が、この文化を求めて努力するプロレタリアートを生み出した。しかし、この文化が言語的文化である限り、彼らは今日なお民族文化の形態においてしか、この文化に関与することはできない。そして、それはこの文化が彼らの民族の言語に移し変えられることによってのみ可能である。それゆえ、社会主義的プロパガンダとその組織は、内容からいえば、国際的だが、形式からいえば、

民族的とならねばならない。したがって、オーストリア社会民主党は、単に国家のためだけでなく、党や労働組合のためにも民族綱領を必要としているのである。ここにおいてもまた、オーストリア社会民主党は、同じ組織の内部での、さまざまな民族の成員の一致団結した共同作業を可能とするような形態を作り出さねばならない。

今パウアーとレンナーが、この綱領の基礎として、民族自治を提案するならば、私は初めから彼らと全く同じ基盤の上に立っている。というのは、私はすでにほぼ十年程前に『ノイエ・ツァイト』誌において、少なくとも最悪の民族対立を取り除くことのある程度は可能にする唯一の手段として「民族の連邦制」に言及しているからである(『ノイエ・ツァイト』十六巻一号、「諸民族の闘争とオーストリアの国法」五一六ページ以下、五五五ページ以下。「再びオーストリアの諸民族の闘争」七二三ページ以下。次のものも参照せよ。「ベームンの国法と社会民主党」十七巻一号、三九七ページ以下。「オーストリアの危機」二二巻一号、三九ページ以下)。

この綱領は中央集権主義とも対立するし、「王国と州」という伝統的な区分を基盤としてその上に打ち立てようとする連邦主義とも対立している。それは、決して民族国家の理念の克服を意味するものではなく、ただオーストリアの特殊な諸関係へのその適用を意味するだけであり、民族組織体の連合——一種の民族国家群——へのオーストリアの変革を意味するものである。

この綱領は、王国や諸州の自治を、それらの多くが民族国家ではなく、同様に多民族国家であり、しばしばごく小さな規模においてそうである、という理由によって拒否するものである。たとえば、小シュレージエンは、一九〇〇年に全体で六〇万人に満たない人口なのに、二八万人のドイツ人、一三万人のチェコ人、一八万人のポーランド人をかかえていた。もし歴史的に伝承された地域の連邦制を実現しようとするれば、それはオーストリアの民族国家への分割を意味せず、多民族国家が生み出すいざござのすべてを、全体から部分へと移し、それを何倍にもすると同時に多様化することになるであろう。

それでは個々の民族は一体どのように構成されるべきであろうか。さしあたり、各民族が住んでいる地域を画定し、その地域の内部では民族的事項に関する自治をその民族に認めることである。

しかし、それに対してレンナーとパウアーは、オーストリアの諸民族は一つにまとまった地域に住んでおらず、さまざまに入り乱れて住んでいるので、厳密に領土的に分割することが不可能であるという事実を持ち出す。それゆえ、彼らは地域原理の代わりに、個人原理を提案する。民族は宗教団体と同じように、地域から独立して特殊な団体として構成されるべきだ、というのである。

もちろん、この原理の遂行に際して、民族は領土なしには存在しえないということが明らかになる。たとえば民族の多くの成

員が他の民族と混ざり合って住んでいるにしても、民族の中核はいつでもあるまとまった領域を占めているはずである。彼らの言語文化生活も、そこに集中しており、その領域からの絶えざる移住なしには、またその言語文化の絶えざる影響なしには、分散して住んでいる民族の成員たちは、やがてその言語共同体と民族性を失ってしまうであろう。

だが、以前には交通共同体と最も緊密に結びついていた言語共同体は、われわれがすでに見てきたように、交通共同体の拡大から取り残され、高度にそれから独立したものとなっている。それゆえ、民族の領土的編成は、経済的交通の編成とは異なったものになっている。経済的交通は、いつでも地理的領域の隣合った部分を一つの単位に結びつける。そのような領域の内部に、たくさんの民族の成員が同居することもあれば、他方で、一つの民族がその領土をいくつかの交通領域の上に広げ、時には隣接せずに飛び地をなしている地域の上にまで広げられることもある。

したがって、経済的交通や技術的文化の必要に基づく国家の編成は、言語的交通や言語的文化の必要に基づく国家の編成とは違った形をとることになる。前者はいつでも、地理的にまとまった境界のはっきりとした領域に従って実現されるであろうが、後者はしばしば細切れにされた地域を含み、絶えざる変動にさらされ、民族のすべての成員を統合しようとすれば、個人原理の適用を必要とするであろう。

レンナーは、『国家を求めるオーストリア諸民族の闘争』という彼の本の中で、この基盤の上に立ってオーストリアの体制の高度に洞察力に富んだ構想をきわめて入念に仕上げたのであった。その構想をパウアーもまた受け入れた。それによると、全オーストリアは、みずから自治を行う諸地域に分けられるであろう。これらの地域の各々は、できるだけ同じ民族の住民のみを含むようにする。同じ民族のすべての地域が一緒になって、一民族を形成する。ここでは、われわれは地域原理にもとづく民族形成をもつ。それは、レンナーの推定によれば、すべての地域のほぼ十分の九を含むことになろうという。残りの十分の一が、その中に二つ、あるいはそれ以上の民族が大量に同居している地域となる。これらの地域に対して、今や個人原理が適用される。そのような地域の各々で、各民族の成員はそれぞれ独自に一団体を形成し、自分たちの民族問題をみずから処理する。同じ民族のこの種の団体のすべてが、結びついて民族全体の大きな組織を形成し、それがその民族問題のすべてについて独自に決定する。しかし、そこでは言語的文化以外のいかなる問題も取り扱うことはない。

正当にも、レンナーは彼が設立しようと望んでいる民族団体に、全国家機能を委譲するのではなく、言語的文化にかかわる機能のみを、主としてもっぱら教育の機能のみを委譲しようとしている。あらゆる他の目的のためには、彼はあらゆる他の国と同じように、一定のまとまりのある行政領域への国家の分割

を保持している。

かくして、オーストリアは二重に組織される。交通領域と民族とに従って。

この二重の組織は、きわめて独創的にして実り豊かなアイデアであり、細かい点に欠点を見出しうる人にとってもまた、最高度に注目し値するものである。

だが、残念ながら、私はわれわれのこの二人のオーストリアの同志の提案に結びついている楽天主義を、共有することはできない。パウアーはいう。

「シュプリンガー(レンナーの筆名)によって立案されたこの制度は、民族間の権力闘争を完全に終わりにすることができ……階級の前進を民族闘争が妨害することはもはやありえない」。

私はここまで言おうとは思わない。シュプリンガーによって提案されたような制度が、民族闘争を封じ込め、民族間の権力闘争を終りにすることが出来ないことは確かである。それは、あらゆるいざござの原因を除去することさえもできない。民族自治が完全に実現するという領域、すなわち、教育の領域においてさえ、決して除去できないであろう。

この自治は、あらゆる民族がその学校制度をみずからの財源で維持することを命じている。ところが、オーストリアには、きわめて貧しい民族もおれば、その隣に豊かな民族、すなわち、裕福な人々をたくさんかかえた民族もいるのである。ドイツ人

の中には、全オーストリアから剰余価値を引き出すだけでなく、他の民族によって作り出された剰余価値をも自分の物にする最も多くの資本家を見出すことができる。他方で、ドイツ・ウィーンが帝国の中心をなし、そこにはすべての国家的中央官庁が徴収窓口や機関を備えて立っている。冬になると、そこには地代を浪費するために、大土地所有者が群れをなして押し寄せてくる。

そのかたわらには、単に小農、職人、プロレタリアのみならず、技術的後進性としばしばまた土地の不毛さのゆえに労働の生産性が低い民族がいるが、彼らは自分たちのわずかな必要を越える乏しい余剰のすべてを、国家や外国の搾取者に引き渡さなければならぬのである。

かくして、個々の王国の富と税負担の差異は、きわめて巨大なものである。

ラウフベルクによれば、直接税を平均して、ルテニア人は各々三・五クロネ、セルビア人とクロアチア人は各々三・六クロネ支払っているが、ドイツ人は皆二二・四クロネ(低地オーストリアにいたっては、四二・六クロネ)も支払っているのである。

したがって、ルテニア人とダルマチア人の学校制度は、ドイツ人のそれよりはるかにみすばらしい状態にある。貧しい民族が豊かな民族をうらやましげに見、国家が公正な調整を図るよう国家に要求するのは当然のことである。だが、このような

方向でのあらゆる試みは、ドイツ人の抵抗に出会わずにはいない。

いっそう困難なことは、民族自治を適用することの出来ない領域で、民族的軋轢を排除することである。国家語の問題は、一体どうなるのか。われわれのオーストリアの友党の一八九九年のブリュン民族綱領は、その点についてきわめて慎重な表現をしている。

「われわれはいかなる民族的特権をも認めず、したがって国家語の要求をも拒絶する。どの程度まで媒介語が必要とされるかは、帝国議会が決定するであろう」。

パウアーもレンナーも、この問題について、これ以上詳しいことは述べていない。だが、まさにこの言語問題こそ——国家語について語ろうと媒介語について語ろうと——その内部に最大の紛争の火種を抱えこんでいるのである。

今日、軍隊のために統一された言語が採用されていることの意味を、ちょっと思い出してみよう。純粹に軍事的な観点からすれば、軍隊における多言語状態は、最も憂慮すべき要因である。この要因を除去することができないとすれば、すべての兵士のための命令語の統一性、ならびに将校のための「媒介語」の統一性は、軍の最高指導部があくまで要求しなければならぬ最低条件である。だが、その場合には、この命令語や媒介語以外の言葉を話す諸民族のすべての成員にとって、一定の不利が存在するのは、一目瞭然である。

官僚たちの国内の職務上の言語としてもまた、統一語なしに済ますことはできない。役人たちがお互いに違った言葉で交流し、その際使われるすべての文書がさまざまに異なった言語で作成されるとすれば、さなきだにだらだらとして形式ばった官僚的手続きは、いっそう耐えがたいものになるであろう。おまけに、国家の官僚機構の領域は絶え間なく成長する。鉄道の国有化の問題を考えてみさえすればよい。ここにもまた、その言語が国内の公用語でない諸民族の成員すべての必然的な権利の侵害、永遠の紛争の火種が見出される。さらに、議会においてはどうか。そこにおいてもまた、正式に決定されたものであるうとなかろうと、一つの媒介語が確かな地歩を占め、議会の大半の議員が知っている言語が、多くの人々によって使われることになる。媒介語に熟達していない人は、現に進行していることが理解できず、議論に割り込んでいっても理解されない。議長も大臣も、この事実上の媒介語に精通していなければならぬ——この言葉を理解できない人は皆、ここでもまた不利な立場に置かれることになる。不利に扱われていると感ずる諸民族は、さまざまの策謀や要求を通じて、平等を再び確立しようとするが、不満の煽動以外の何物も実現できないであろう。

最後に、個人的、地域的な利益の供与——地位、称号、鉄道や運河の建設等々——においても、中央政府によって優遇される民族もあれば、不利に扱われる民族もある。

オーストリアにおいて、初めから媒介語または国家語の地位を占め、他のいかなる言語によっても取り替えられない言語は、ドイツ語であるが、それは、単に最も強力で、経済的に最も発達した民族の言語であるだけでなく、オーストリアの諸言語の中で唯一の世界語であり、帝国内の知識人の誰でも、現代文化を享受しようと思えば、どんなことをしても習得しなければならぬ言語であるからである。

それゆえにまた、ドイツ語に習熟している人々が、オーストリアではいつでも他の人々に比べて有利な地位にあるという。彼らは国家の中で最高の地位を公然と占め、国家を統治し、軍隊に命令し、議会の決定を左右しうる唯一の人々である。

いかなる制度によっても除去されえない事態の本質に根ざしたドイツ人のこの優遇は、いつでも非ドイツ人の羨望と不満を呼び起こす。国家内の権力をめぐる諸民族の闘争を、オーストリアのために完全に終わりにするような制度を見出すことは不可能である。

だが、レンナーの制度は一つの事を可能にする。それは、学校をめぐる諸民族の闘争、ならびに市町村や郡における権力闘争を終わりにすることができるであろう。つまり、民族闘争の中でも最も偏狭で、最も悪意に満ちた性格の闘争、大衆の大部分をなす小ブルジョアジーや農民分子に最も強力な影響を及ぼしている闘争を終わりにすることができるであろう。それによつて、国家権力をめぐる諸民族の闘争を終わりにすることはでき

ないかもしれないが、一方で闘争は大きな対象に限定されるようになり、他方で住民大衆にあまり関わりのない対象に限定されることになるであろう。その場合には、大衆が民族問題よりも他の問題により多くの関心を抱く可能性が生まれるかも知れないし、民族闘争が不可避的となる所でも、その鋭さが失われ、民族感情も衰退し、目的に適ったものと可能なものを見分ける力を曇らせることもなくなるかもしれないのである。

それによって、オーストリアの多民族国家が、民族国家の行政能力の水準まで高められることはまだないであろうが、いずれにせよ、多民族国家が到達しうる最高水準までは高められるであろう。

だが、人はこれによって今や、偉大で実りある改革運動への進路が開かれたのだ、と期待してはならない。あたかも民族的不和のみが、それを妨げているかのように！ われわれは、ブルジョアジーのさまざまな階層の今日の政治的、社会的状況のゆえに、ブルジョア議会議主義がいたるところでどれほど成果のないものになっているか、を見ている。われわれは、ここでこのことを理由を挙げて説明しようとは思わない。それには一つの論文を必要とする。それにしても、事実自体ははっきりしている。われわれは、今日フランスでもイギリスでも政権についているブルジョア急進主義の無能力そのものを思い出してみさえすればよい。オーストリアの議会からそれ以上のものを、人はどうして期待できようか。民族闘争は、ここではただブルジョ

ア議會主義の無能力に特殊な性格を与え、さらにそれを一層強化しているだけである。

まさにこの無能力のゆえに、諸民族の自治が、bauerやレンナーが提案するようなやり方で、プロレタリアートが政権を獲得する以前にいつか実現されることになるのかどうか、われわれにはきわめて疑わしく思われるのである。なぜなら、断固たる力と決意とをもってこの要求を支持しているのは、プロレタリアートだけだからである。bauer自身、民族対立が他の諸階級の中にも、どれほど深く根づいているのかを認めなければならなかった。だが、彼は民族闘争についてはすべての人にとって耐えがたいものになるであろうと期待した。

「諸民族と諸階級の平和的信念からではなく、ますますつめてくる民族的憎悪、ますます激しさを増す民族闘争、あらゆる立法団体の完全な麻痺から、民族的平和を求める反対の傾向が勢力を増し、明確な内容をもつようになるであろう。民族闘争が民族自治を生み出すのである」(五九四ページ)。

それゆえ、bauerは、さしあたり対立の激化を望んでいるのである。たしかに、それはますます民族的平和への渴望を生み出すであろう。だが、それによって、この対立の激化が社会民主党によって提案されている方策に対する共感を、ブルジョア諸階級の中にも吹き込むとまでは言えない。搾取諸階級は、中央議會への普通選挙権よりもはるかに嫌っている地方自治に対して、抜きがたい嫌悪の念を抱いている。そこでは、彼らは

プロレタリアートが、今後もずっと長く農民や小ブルジョアジーによって、圧迫されていることを望んでいるのだ。それに反して、プロレタリアートが優位を占めているような工業地域もすでに十分存在している。さしあたり、民族闘争の先鋭化がありうるとしても、民主主義的自治の理念へのブルジョアジーの改宗はありそうにない。

ブルジョアジーと並んで、オーストリアで重要な要因となっているのは、官僚機構である。官僚機構とその頭部である王冠に、今やbauerとレンナーは格別な期待をかけている。諸民族の自治がなければ——と彼らは言う——国家は破滅してしまう。官僚機構と君主制は国家の維持に最大の関心をもって、から、彼らも民族自治のために精一杯努力しなくてはならず、社会民主党と同じ方向で活動しなくてはならない。たつたいま、選挙権闘争を幸運な結末へと導いたこれらの分子たちの平行行動は今後も一層進展するにちがいない。特に、ハンガリーの事態の発展は、それを促進するであろう。

「帝国の内的な諸力は民主主義的平等と民族的自由の思想を王冠の権力手段にするシーザリズムの方向に進んでいる」(四三六ページ)。

すでもっと前のところで、

「生きるといふ国家の必要性は、官僚機構の権勢欲よりも強力である！ 官僚機構がばらばらになったオーストリアをもちや管理していくことができなくなるやいなや、官僚機構はみず

から行政への民衆の参加を呼びかけるであろう」(四〇三ページ)。

これは、私には幻想であるように思われる。しかも危険な幻想である。それはあらゆる歴史的経験に反している。ハプスブルグ家の人々とその官僚機構は、特別に神の恩寵を受けているとでもいうのだろうか。

選挙改革への王冠の介入によって惑わされてはならない。ロシア革命がこの過程に対してどのような影響を及ぼしたか——一九〇五年のロシアの十月の日々と、今までオーストリア政府によって完全に拒否されてきた平等・直接選挙権に対するオーストリア政府の突然の熱狂とが、時間的に完全に一致している——という問題は、ここでは完全に度外視することにしよう。

だが、選挙改革においては、政府はその権力や権限のほんのわずかといえども放棄してはいなかった。官僚機構と王冠の犠牲においてではなく、とりわけ貴族階級の犠牲において、選挙改革は遂行された。普通・平等選挙権は、バウアーの言葉を借りれば、いつでも「シーザリズム」のお気に入り手段であった。しかし、ナポレオン三世がフランスの社会主義者に対して、またビスマルクがドイツの社会主義者に対して、そのために特別の恩義を感じていると思ったり、これらの支配者たちから「民主主義的平等」や「民族的自由」を期待することができるという結論を引き出すことは、全く馬鹿げたことである。たしかに、シーザリズムはある種の平等、すなわち、政府とその権力手段

である官僚機構と軍隊の前においてすべての階級が平等に無力である状態のために努力する。まさにこの無力状態を実現するために、上層階級と下層階級の力を均衡させることが必要であるが、そのためには、一定の諸条件のもとでは、普通・平等選挙権の導入がシーザリズムにとって適切な手段のように見えるのである。だが、それが適切な手段であるのは、シーザリズムが同時に官僚機構と軍隊とを信頼することができ、これらを無制限に支配し、無限にシーザリズムの意のままにしようする場合だけである。行政の民主化による官僚権力のあらゆる制限に対しては、官僚的君主制は、シーザリズムの性格のものである。他の性格のものであると、いつでも最も精神的に抵抗する。官僚的君主制が、最も容易に折り合うことができるのは、純粹に農村地域における地方自治——しかも村だけの自治——である。そこでは、中央権力が自治によって弱められることがないからである。村の民主主義的共産主義は、周知のように東洋的専制政治の基盤である。それに反して、多くの都市住民、とりわけ強力なプロレタリアートをもった国においては、十分な地方自治——とくに多くの市町村を含む郡のようなより大きな地域の自治——は、中央政府の絶対的権力にとっては大変な危険であり、中央政府がみずから進んでそれを認めることは決してないであろう。

ところが、バウアーとレンナーは、中央政府がプロレタリアートと手に手をとって精力的に、そのような自治のために努力す

るであろうと期待しているのだ!

ハンガリーの諸事情も、この点でなんら異なっていない。おそらくそこでは、王冠の利益において、普通・平等選挙権の精神で選挙改革が要求され、しかもライタ川〔ドナウ河の支流〕のこちら側よりも一層緊急に要求されているという状況が支配している。パウアーとレンナーが、この状況とその基盤について語っていることは、卓越したものである。それゆえ、メーリンクがレンナーの著作に奉った賞賛の言葉は、全く当然のものである。パウアーは、重要な点でレンナーの著作を補充し、訂正した。

西オーストリアと同じく、ハンガリーもまた今日ではますます荒々しい民族闘争の場所となっている。

今までのこの国で多数をなしていた諸民族、すなわちスロバキア人、ルーマニア人、南スラブ人、ドイツ人などが、マジヤール人貴族の支配を甘受してきたにしても、経済的發展とともに今や彼らもまた民族意識に目覚め、自分たちの無権利状態に反抗するようになってきている。

その点で彼らは、たとえばプロイセンの仲間たちと同じく、いつも決して卑屈な宮廷貴族ではなく、絶えず君主制と精力的に敵対してきたマジヤール人貴族との闘争に陥っている王朝に出会うのである。そして、プロイセン貴族たちと同様、マジヤール人貴族たちもまた、自分たちのために国家の援助、あらゆる種類の施し物を求めて叫んでいる。その際マジヤール人貴族は

貪欲で飽くことを知らず、ますます前に進み、財政的破局の増大によって一層その方向に駆り立てられている。かくして、今やマジヤール人貴族は、一つの限界に達し、それを踏み越えていくことを嵐のように激しく要求しているが、それを越えて彼らに従うことは王冠にはできない。ハンガリー貴族は、ハンガリーの連隊における将校の地位を独占しようとし、それゆえ、ハンガリー語の命令語を要求している。しかし、軍隊の統一を保持するという利益のために、王冠はドイツ語の勤務語を堅持しなければならぬ。君主というものは、なによりもまず、いつでも自分を大元帥だと感じている。ここに、彼の権力の根源があり、それに触れる者に対して、かれは宣戦布告するのである。

だが、ハンガリー語の命令語は、まだ決してハンガリーの小貴族たちを満足させるものではない。官僚機構や軍隊の中で、彼らの意のままになる地位は、彼らにとっても、彼らの後に続くたくさんの空腹をかかえた次の世代にとっても決して十分ではない。彼らのもっと収入のよい地位を望んでおり、そのためには産業の繁栄が必要である。今や産業が全力を挙げて作り出されねばならない。それゆえ、彼らはオーストリアの産業から自分たちを守ってくれる関税政策を要求している。つまり、ハンガリーのオーストリアからの軍事的分離と並んで、経済的分離もまた望んでいるのである。ただ王朝のみが、この二つの部分を統一すべきだ、というのである。しかし、一体何時までか。

ノルウェーの例は、二つの部分が対立する利害をもった時には、同君連合による結び付きがどれほど容易に解体するものであるかを示している。かくして、ハプスブルグ家の人々とハンガリー貴族との間の裂け目はますます深くなっている。

この二つの分子の闘争に際して、王冠はハンガリーの被抑圧諸民族の中に、歓迎すべき同盟者を見出している。これらの諸民族を強化することが、王冠の主たる目標となるにちがいない。そのためには、普通・平等選挙権の実現がきわめて有効である。はたせるかな、王冠はオーストリアではなく、ハンガリーに彼の選挙改革に好意的な核心部を発見したのであった。だが、オーストリアにおいて、ハンガリーにおけるよりも早く選挙改革が実現することになったのは、ひとえにオーストリア・プロレタリアートの性急さと力によってなのである。

王冠とハンガリーとの闘争は、今やと始まったばかりである。両者のうちのいずれも、他方によって脅かされる危険を知っているが、それぞれまた、相手の実力も知っており、それゆえ、あえて決定的な攻撃に出ようとはしない。人々はまだ合意に達することを求めているが、事態は人々の意図を越えて進むであろう。われわれは、ハンガリーにおける民族闘争の絶えざる激化と、王冠と貴族の間の対立の絶えざる激化にも備えていなくてはならない。最も激しいやり方での予期しない突然の出来事が、そこから起こり、それが西オーストリアに反作用を及ぼすということもありうるかもしれない。プロレタリアートは、こ

の発展を最大の注意力をもって追跡すべきあらゆる動機をもっており、いつでもあらゆる状況から、引き出すべきものを引き出す用意がなくてはならない。だが、ここでもまた、たった一つの事のみが確実である。すなわち、対立と闘争の激化にもかかわらず、官僚機構と王冠の民族自治の制度、広範な民主主義的自治の制度への改宗は、最もありそうにないことである。むしろ反対である。闘争が激化すればする程、官僚機構は手綱をなして、闘争者たちを放任しておくことを恐れるようになり、ますます精力的にすべての権力手段にしがみつこうとするであろう。

民族自治の綱領は、オーストリアの支配階級や軍隊の一つをも味方に付けようという見込みを全くもっていない。少数のイデオログが、それに熱中するということもありうるかもしれない。官僚機構もまた、おそらくパウアーやレンナーの諸提案から多くの示唆を受け、そのうちの多くを実現するかもしれない。だが、民主主義的自治の綱領だけは必要としないであろう。われわれの同志の提案の核心であるこの要求だけは、プロレタリアートを除くオーストリアの大階級のいずれにおいても力強い熱狂的な支持を期待することはできない。

しかし、このことはパウアーとレンナーの民族問題に関する労作が無用のものであるということの意味するものではない。ただその意味が、部分的にわれわれの二人の同志が想定した所とは違った領域にある、ということなのである。この諸民族の

複合体から生命力のある国家を作り出そうというオーストリアの革命化にとつては、この二人の労作はほとんど役立たないであろう。というのは、かれらの提案が目的に適わないからではなく、ブルジョア社会とブルジョア国家が、いたるところで、それゆえオーストリアにおいてもまた、哀れむべき継ぎはぎ細工以上のものを提供する能力を欠いているからである。オーストリアを現に支配している政治家たちにとって、レンナーとパウアーの提案は、古い継ぎはぎ細工を一層多様なものにする新しい継ぎ布の仕入れ先以外の何物でもないのである。「絶え間のない難儀」を意味する「Gefetz」という、この真にオーストリア的な、ドイツ文章語に翻訳しにくい概念が、その大往生の日までハプスブルグ君主制の商標であり続けるであろう。

それに反して、われわれの同志の著作は、オーストリア社会民主党の力と団結にとつて最大の意味をもつことになる。個々の点に関しては、いろいろと異議を唱えることができるかもしれないが、これらの著作は、国家、州、市町村の民族政治やわれわれのオーストリアの兄弟党の内部組織とプロパガンダの基になっている諸見解を著しく深化し、明確化したという意味をもっている。

その際、とりわけ実りの多いのは、オーストリアに二種類の組織を与える——その一つは民族に従う言語文化の任務のためであり、そこには個人原理が導入されなければならない——というレンナーの提案である。そして、もう一つの組織は、技術

的文化的任務のためであり、純粹に領土的に構築されることになる。

この提案が国家レベルで実際に実現するかどうかはともかく、それは党の組織にとつてもまた適用可能であるという思考過程から生み出されたものである。

国家と同様、党もまた二重の任務をもっている。一つは言語的文化的、すなわちプロパガンダの任務であつて、それが十分に目的に適うように行われるためには、党の組織が民族に従つて個人原理に基づいて組織されていなければならないのである。

それと並んで、政治的、労働組合的、協同組合的領域における力の展開という任務がある。そのためには、ある一定の地域での民族性の区別なしの全プロレタリア勢力の結集が必要である。

かくして、民族の自治が、文書による、口頭による、政治的、労働組合的プロパガンダの課題にとつて、重要で不可欠なものになればなる程、それは行動の領域では危険なものとなる。

ここに見たところ一つの矛盾がある。だが、われわれはすでに、そのような矛盾は近代の文化の発展の全本質を貫いているものであることを見てきた。近代文化の発展は、一方では、国際文化の領域をますます拡大し、国際関係をますます緊密にするのであるが、他方で、一定の文化領域のためには民族的契機をますます強力に前面に押し出すのである。社会におけるこの矛盾を克服することは、どこにおいても勝利したプロレタリアートの課題となるであろう。この矛盾をプロレタリアートの闘争

組織の内部で、今日すでに克服することは、多民族国家の内部で闘うプロレタリアート、とりわけ巨大多民族国家の最高度に発達したプロレタリアート、民族問題が最も困難な形をとっている国のプロレタリアート、すなわちオーストリアのプロレタリアートの課題である。とりわけここでは、民族自治と中央集権的統合の間の総合(「ジンテーゼ」、プロレタリアートの闘争にとつて両者が共に必要であり、そのうちのいずれか一方だけでは、不十分であるどころかかえって有害に作用する二つの原理の間の総合(「ジンテーゼ」)を発見することが肝要なのである。

この点についても、バウアーは非常に美しく正しく言う術を心得ている。だが、残念ながら彼は、ナショナリズムとインターナショナリズムの総合(「ジンテーゼ」)を原理的に把握し、発展させる道を閉ざしてしまっている。というのは、彼は民族を言語共同体ではなく、文化共同体として、しかもその民族的性格と国際的性格を分けることなく、総体としての文化の共同体として把握しているからである。ここに彼の本の根本的弱点があり、それによって彼は多くの重要な洞察への道をふさぎ、民族的契機のあまりに過大な評価と国際的契機の完全な無視にたち到ってしまったのである。

レンナーの著作には、このような欠陥は見当たらない。第一に、彼は特殊にオーストリアの問題のみを扱っており、民族の本質に関する一般的叙述などをしていないからであり、第二に、彼にあっては、民族は一般的な文化共同体としてよりも、はる

かに多く言語共同体とみなされているからである。

バウアーがこの欠陥を克服するのに成功するならば、民族および民族問題に関する彼の著作は、単にオーストリアの党の実践にとつてだけでなく、この党の国際的理論にとつても、同時にまた国際的な社会主義の実践にとつても基本的な書物となるであろう。そして、レンナーとバウアーが要求し、根拠づけた民族性と土地に基づく国家と党のあの二重の編成は、社会主義的行政組織の形成にとつても重要なものとなるにちがいない。

プロレタリアートが政治権力を獲得した時には、旧来の多くの慣習とともに、旧来の国家的限界もまた乗り越えられるであろう。国際関係が大層緊密になってきているので、今日すでにヨーロッパ、あるいは少なくとも中部ヨーロッパの関税同盟が、ブルジョア政治家たちによってさえますます緊急なものとして要求されている。だが、経済対立の絶えざる激化を伴う資本主義的発展は、国家を相互に分かつところの関税障壁の不断の強化に行き着く。すでにブルジョア世界にとつても有利であり、いやそれどころか不可欠であるにもかかわらず、ブルジョア世界にはそれをする能力がなく、優勢な特殊利害によって妨害されている多くの他のものと同じように、ヨーロッパ合衆国もまたプロレタリアートの勝利によって初めて可能となるであろう。いや単に可能となるだけでなく、確実になるだろう。

バウアーとレンナーが、オーストリアから作りだそうとした多民族の連邦国家は、その時にはヨーロッパの諸国から作り出

されるであろう。今日オーストリアの構成のために役立つ同じ問題が、その時には、この新しい共同体の構成のために浮かび上がってくるであろう。すなわち、民族と経済領域に基づく二重の組織が、この新しい問題の適切な解決策となるであろう。

この点で、オーストリアはなお模範となりうるであろう。オーストリアの社会主義思想家が、それについて公表したすべての理念、オーストリアのプロレタリア組織がそれについて集めたすべての経験、最後に、この理念とこの組織とが、オーストリア政治のさまざまな領域において民族問題に関して獲得したあらゆる成果——これらすべてが全ヨーロッパの改組、いやそれどころか全ヨーロッパ文化圏の改組を促進するであろう。

だが、その時には、今日ではまだオーストリアを必要だと信じている諸民族にとってさえも、オーストリアそのものが余分なものとなるであろう。全ヨーロッパが民族性と経済領域に従って編成された時——一つの連邦国家は全連邦国家の中でどのような位置を占めることになるであろうか。今日のオーストリアの全ての民族が、現在の帝国領域の外部に住む言語上の仲間たちと一緒にあって、言語文化の自治を目的とする団体を形成するならば、その時になおどのような要素が、特別な多民族国家のために残っているであろうか。

原注

(1) バウアーは不当にも『ノイエ・ツァイト』二三巻二号、四六四ページの私の論述を反駁している。私は、そこでロシア人の民族的性格ではなく、全スラブ人の民族的性格を否定しているのである。

(2) オーストリアの選挙改革の統計的資料。Brünn, Ir-rgang. 1, 50 Kronen.

原注は以上二つだけであるが、文中「」内の説明は訳者がつけたものである。

(一九九九・八・一八)